

2014年8月30日

各位

山口静一「フェノロサ、ピゲロウと三井寺法明院」

一昨年11月、日本ボストン会の創立20周年を記念して、会報に連載した山口静一会員に「フェノロサ：東西融合の思想」の題で発表をお願いし、昨年迄の上記連載分と併せ、その後の参考資料なども書き添えて合本改訂版を制作いたしました。ご参考までにお届けいたします。

フェノロサはハーバード大学修士課程修了後の25歳で日本に赴任(明治11年)、12年間に東京大学で西洋の政治経済、哲学思想を教える傍ら、日本美術の振興に大きな貢献を果たし、37才で帰国(明治23年)しました。アメリカに在ってフェノロサが日本の文化・芸術を紹介し、日本理解のために尽力した功績は極めて大きいものであります。

因みに、フェノロサの教え子であった岡倉天心は26歳でフェノロサの協力を得て、東京美術学校(東京藝術大学美術学部の前身)を開校(明治22年)し、翌年校長に就任しました。天心は明治31年に辞職を余儀なくされました。この時、天心を慕っていた教授たちが集団で美術学校を辞める騒ぎとなり、同年、東京谷中に天心主宰の日本美術院が創設され、新しい日本美術の創出に関わる活動を開始します。これはかつてフェノロサが鑑画会を組織して目指した方向と同じ路線を行くものでした。

天心は明治34年に現在の北茨城市五浦に別荘を新築し、この地に日本美術院第一部(絵画)を移転、横山大観ほか3人の画家を家族と共に移住させて、絵画の制作に専念、明治40年の文部省美術展に出品させ評価される成果を上げました。天心はこの日本美術院の活動を助ける必要があり、ボストン美術館の理事であったピゲロウに相談し、明治37年に渡米、ボストン美術館東洋美術コレクションの分類整理と目録作成にあたり、明治43年には中国・日本美術部長に就任してボストンと東洋との文化的連携作りに尽力します。天心は大正2年に病気を得て急遽帰国し、同年9月に病没しました。

天心が五浦の岸壁に建てた茶室六角堂はまさに東西文化融合の象徴でしたが、平成23年3月の東日本大震災で流失しました。管理者の茨城大学五浦美術文化研究所には、これを憂えた有志の募金が寄せられ、翌年早速再建できたことは、フェノロサや天心の理想が現代まで生き続けている証左でありましょう。

文化交流には、日本とニューイングランドの交流に見られるような、このように長い期間にわたる人と人のコミュニケーションが必要です。この合本がお役に立つことを願ってお届けいたします。

日本ボストン会

会長 長島 雅則

添付

日本ボストン会創立 20 周年記念プログラム

日本ボストン会会報掲載分（# 30～39、41）

（2007年10月～2013年3月）

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院

山口 静一

ご挨拶

日本ボストン会は1992年10月30日、日本ボストン会設立委員会世話人会の呼び掛けで設立準備会が東京工業大学大岡山キャンパスにおいて開催され、55名の参加者のご賛同を得て発足いたしました。

爾来、「日本と歴史的に関係の深いニューイングランド地方との交流を促進し、日米友好の増進に寄与する」ことを目指して、会員相互の親睦を計る活動を継続して参りました。

時が経つのは早いもので昨年秋、20周年の節目を迎え、記念プログラムを企画いたしました。

この間にいろいろの出会いがありました。その内、2007年に会員有志の企画により、会員である山口静一先生のお世話で琵琶湖を眺める三井寺を訪ねる旅行が実現しました。その旅行記の報告（別記）と共に、山口先生の「フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院」のご寄稿を契機に想が湧き、10回にわたる連載となり、2012年3月に完結しました。同年11月の記念式典では山口先生に記念講演もお願いし、この記録も会報に収めました。

そこでこの機会にこれまでのご発表分を合本し、日本ボストン会会員でご関心を持たれる方に、100年余前に日本とアメリカの文化の交流に貢献したフェノロサとビゲロウの記録を今の時点で振り返り、「東と西」の文化の理解を更に如何に深めていくか、そのヒントを考えて頂きたいと願っております。

これまで、日本ボストン会の活動にご支援をいただきありがとうございました。今後とも、引き続きご支援のほどお願い申し上げます。

日本ボストン会会長 長島雅則

平成25（2013）年11月15日

大津一湖都の路 ～新緑の古社寺めぐり～

酒井一郎

昨年の総会の会話の中から、“歴史を飲もう会”、“美術の会”の幹事間で、予め持ち越しになっていた琵琶湖周辺の社寺の訪問・鑑賞を合同開催でやろうということになりました。

美術の会としては、2年に1度名古屋ボストン美術館を訪問、美術鑑賞を過去3回、1泊2日で実施し、名古屋在住の久米生光さん、清水建設の内藤克巳さんに大変にお世話になり、美術館以外の名古屋およびその周辺のご案内をいただきました。

来年はどうするかと思っておりましたので、この合同企画に乗ることにしました。三好彰さんは大津のご出身で琵琶湖方面は詳しく、企画段階から積極的にご参加をいただきました。(別項参照)

篠崎史朗さんは三井寺(法明院、フェノロサの墓)に強い関心をお持ちでした。(別項参照)

そこで、三好さんの話を良く伺い、今回の旅行を「比叡山延暦寺と大津一湖都の路(新緑の古社寺めぐり)」(略して大津旅行)と名付けることになりました。

まずは大津市観光振興課に電話を入れて資料を入手し、交通手段・ホテル、見学鑑賞ルートについての概算費用などを調べました。

又、当会会員であり、フェノロサ研究の権威である山口静一先生に、篠崎さんから連絡を入れてアドバイスをいただき、3人の間で密接に連絡を取り、旅行の計画書を前号の会報に掲載、5月24～25日の1泊2日旅行計画で参加者を募りました。

会員からは14名のお申込みをいただき、これをベースに旅行代理店をあたったところ、JR東海の関係で品川駅構内にある東海ツアーズからJR+ホテルの格安関西旅行セットクーポンが発売されていて、当初案より1万円も安くなることが判りました。

参加者には宿泊希望か、新幹線とのセット購入希望かの回答を求め、旅行代理店の確認後にチケット(クーポン券)の購入、決裁方法をご案内しました。

この間、篠崎さんから山口先生に連絡を取られ、当日は先生がわざわざご参加いただき、法明院においてフェノロサ、ビゲロウについてのお話いただける手筈が整いました。ただ、先生がご懇意にしている法明院の阿闍梨滋野敬淳師のご都合で、法明院を尋ねる日取りが一日繰下げられ、比叡山延暦寺は前日の5月24日に訪れることになりました。

旅行の直前に、幸野真士氏の入院手術の日程が入り、幸野夫妻が不参加という事態が生じましたが、代わりに藤崎先生ご夫妻と、ボストンから来日中であった吉野耕一先生のご参加があり、変更が生じました。

幸いなことに、この直前の変更も東海ツアーズの方で、予約変更の手配を受け入れてくれましたので、何のトラブルもありませんでした。ホテルの手配も、当初は琵琶湖ホテルが予定されていました。しかし申込みの時には大津プリンスホテルに変更されましたが、宿泊してみて、これが正解でした。

当日、参加者は東京駅午前8時33分発ののぞみ63号に、始発駅、又は最寄り駅から乗車するように求めました。昼食は京都到着前に車内で済ませることにして、参加者は指定席で乗車の方、都合で自由席の方に分かれ、さらに京阪電車石山坂本線石山駅に直行された方、様々なルートで参加されました。

当日、幹事間で旅行コースをチェックした結果、当初予定のJR京都駅でのJR琵琶湖線への乗換と、JR石山駅での京阪電車の石山坂本線での乗換に迅速に行動することになりました。

京都駅では東海道本線ホームに11時前に新幹線組が落合い、JR石山駅に到着(11分)、駅の外で藤崎先生夫妻も合流し、京阪石山駅から石山寺駅(3分)に到着、徒歩(10分)で石山寺に向かい、石山寺には11時半過ぎに到着しました。

石山寺は琵琶湖に注ぐ瀬田川西側伽藍山の麓に位置し、新幹線の鉄橋越しに瀬田の唐橋が望める場所に建てられている。当日は晴天に恵まれ、境内を散策し、源氏物語の作者である紫式部ゆかりの展示品を見ることができました。(約1時間半)

石山寺拝観後、比叡山延暦寺に向かうことになったが、事前に琵琶湖タクシーに連絡を入れておき、石山寺駅から京阪石山坂本線近江神宮前駅(24分)に向かった。同駅前にはタクシー(5人乗り、又は6人乗りあり)3台を手配し、延暦寺根本中堂までタクシーで向かいました。(料金約2500円前後)

お陰で、京阪電鉄と比叡山坂本ケーブルを使って行くより、随分と時間も費用も節約できました。

比叡山延暦寺では、総本堂である根本中堂を中心に東塔と比叡山国宝殿の見学が目一杯で、西塔、横川は次の機会と言うことになりました。(2時間余)

根本中堂からケーブル延暦寺駅までは徒歩(10分)、途中、西日に輝く琵琶湖を良く眺め、ケーブルカーでケーブル坂本駅に下り(11分)、そこから紅若バスでJR比叡山坂本駅に移動(7分)。同駅からJR湖西線で山科駅(8分)、山科駅からJ

R琵琶湖線で大津駅(4分)に辿り着きました。

大津駅から少し離れた場所にはシャトルバスの出迎えがあり、午後6時過ぎには大津プリンスホテル(38階建)に到着しました。湖岸に建てられたホテルの部屋からの眺望は素晴らしく、全室から琵琶湖を眺めることができました。

夕食は午後7時に予約しておきました。マルモラーダ特製ディナーバイキングでした。夜景を楽しみながら、乾杯し、ゆったりした気分で食事を取り、遅くまで歓談していました。その夜は、やや広めの部屋(14階)に置かれたツインベッドで心地よく睡眠をとることができました。

翌朝は小雨模様、ホテル最上階のレストランでの朝食後、篠崎さんが法明院までタクシーを手配され、タクシーに分乗して約10分で到着しました。

タクシーを下車して6~7分歩いたところに法明院が緑に包まれて佇んでいました。朝早く東京を立たれた山口静一先生が到着されており、ご住職とご一緒に、我々を出迎えていただき、本堂に通されました。(午前10時頃)。

本堂には仏像が安置され、フェノロサ、ビゲロウのお位牌・写真も飾られていました。障子戸は明け広げられ、雨に覆む琵琶湖が一望できました。

フェノロサ学会会員のスコット・ジョンソン関西大学教授(大津市在住)、幹事の岩井隆興さんも参加され、全員が本堂の畳に座り、ご住職の読経・法話のあと、山口先生からフェノロサ、ビゲロウのお話を伺いました。

山口先生のお話(別項参照)は大変面白いものでしたが、フェノロサ、ビゲロウが仏教に改宗した理由の一つに、ブッダは異教の神々に変身すること、キリストもその一例に過ぎないと感じたことを挙げられました。面白いお話ですね。

この後、米国から持ち込まれた遺品や写真を拝観後、参加者全員の記念写真を藤崎博也先生が撮影、雨中、フェノロサ、ビゲロウのお墓に参拝(約1時間半)、ご住職、山口先生にお礼を述べ、雨中、徒歩で園城寺(三井寺)に向かいました。(30分)

三井寺本堂の金堂は修復作業中のために外側は天幕で覆われていたが、鐘楼、弁慶の引摺り鐘、釈迦堂などを拝観、見学後(1時間半)、境内の駐車場脇の茶屋にて昼食をとり、午後2時現地解散となりました。

帰路、直接帰京した方々、相国寺で開催されていた若冲展を見て京都に1泊した夫婦、沖縄まで足を伸ばした夫婦、天の橋立に立寄る組、等々、皆が旅行を楽しんだ大変意義ある合同企画でした。

大津旅行

日程: 5月24日(木)~25日(金)

見学コース: 1日目 石山寺、比叡山延暦寺
2日目 法明院、園城寺(三井寺)

宿泊: 大津プリンスホテル
(☎077-521-1111)

交通: (往路: 5月24日新幹線利用)

東京駅(発) 8:33 (のぞみ63号)
新横浜駅(発) 8:50
京都駅(着) 10:53
京都駅(発) 11:00 (東海道本線)
石山駅(着) 11:12
(徒歩 2分)

京阪石山駅(発) 11:21 (京阪石山坂本線)
石山寺駅(着) 11:24

石山寺駅(発) 13:29
近江神宮前駅(着) 13:29
(タクシーで延暦寺根本中堂へ)
ケーブル延暦寺(発) 17:00
ケーブル坂本(着) 17:11
ケーブル坂本(発) 17:20 (江若バス)
JR比叡山坂本(着) 17:27
JR比叡山坂本(発) 17:34 (湖西線)
JR山科駅(着) 17:45
JR山科駅(発) 17:51 (東海道線)
JR大津駅(着) 17:55

交通: (復路: 5月25日 新幹線利用)

京都駅(発) 15:20 (のぞみ92号)
新横浜(着) 17:30
東京駅(着) 17:46

旅行代理店: JR東海ツアーズ品川支店
☎03-6718-1031

旅行プラン名: ツーパック 琵琶湖 大津プリンス宿泊

費用: JR+ホテル ¥29,800
(当初の概算は¥39,000)

交通費・拝観料・お布施 10,000

夕食・昼食込み 一人 約50,000

フェノロサとその周辺

篠崎 史朗

当会で「ニューイングランド交流の記録」を企画した頃(*)、天心岡倉覚三に関連して、フェノロサとピゲロウの二人には特に強く惹かれたことがあった。(※会報#12、1頁、1998年)

拙文「もう一人の特使：天心 — ポストンでの初年」では、“師弟と言う関係は別にして、天心にとって人生の恩人はと問えば、フェノロサともう一人ピゲロウだ”と、素人ながら、その頃のおもいを記述した。(要旨紹介、同#15、5頁、2000年)

しかしながら、天心に関しては、全集もあり、評伝や多くの参考書籍が出版されているので、調べる上で材料に事欠かないが、いざフェノロサやピゲロウとなると、入手可能な書物の記述も凡そ断片的で、門外漢にとっては、全体像の理解など甚だ困難のように思えた。

結局、大学図書館で出逢った「アーネスト・フランシスコ・フェノロサ — 久富貢著 中央公論美術出版1980年」を主たる参考文献としたが、疑問や割り切れぬ点をのこしたままとなった。

その後、青山の美術館主催の「天心研究会」で、フェノロサ研究の第一人者として、山口静一先生の存在を知り、私信でフェノロサ離婚の真因などについてお尋ねしたことがあった。

これが当会と先生との最初の接触だったと思う。同時に、先生に「フェノロサ(上)、(下) — 三省堂出版1982年」の著作があることを知り、早速神田の古書店で探してみたが、売り物がなく、結局諦めざるを得なかった。

ところが、本年5月の当会の大津旅行の直後、偶然東京駅八重洲口の古書店でこの著作を見つけ、入手することが出来、園城寺墓参直後でもあったので、殊更強い興味を持ってこれを読むことが出来た。

この著作は日米文化交流の原点を探る作業の一環として、長年月を費やして収集した資料を駆使して、フェノロサの人物像とその周辺を、時代を追って、多角的、総合的に浮き彫りにした本格的な大作の評伝である。現在、フェノロサに関する著作としては、これ以上のものは期待しがたいであろう。

山口先生には、墓参に際して、最新の史実を交えてご講義いただき、旅行は大変感銘深いものとなった。更に当会会報に連載で「フェノロサ、ピゲロウと法明院」をご寄稿して頂ける由。大いに楽しみにしている次第である。



写真撮影 篠崎

三好氏

篠崎夫人

山崎氏

スコット先生
滋野阿蘭梨

酒井氏

山口先生

吉野先生

藤崎先生

法明院記念写真
藤崎夫人

吉川さん

水野さん

山崎夫人

三好夫人

酒井夫人

俣野夫人

俣野氏

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院

目 次

【1】	はじめに	通巻 1	【30】	ボストンとの訣別	15
【2】	フェノロサ、ビゲロウの受戒	1	【31】	日本再訪	16
【3】	登場人物のプロフィール	1	【32】	メアリの喜びと悲しみ	17
【4】	発端はブラキポッド	3	【33】	巡回講師の生活	17
【5】	モース東京大学教授就任と フェノロサ推薦	3	【34】	フェノロサ、ロンドンで急死	18
【6】	フェノロサの生い立ち	3	【35】	フェノロサの訃報	18
【7】	フェノロサ来日の経緯	4	【36】	ボストンでの反響	19
【8】	明治初年の宗教環境	5	【37】	フェノロサ追悼法要	19
【9】	モースの進化論講義と クリスチャンの反発	5	【38】	遺骨の三井寺移葬	20
【10】	フェノロサの宗教沿革論と キリスト教批判	6	【39】	墓碑の完成	21
【11】	フェノロサ、日本美術への傾倒	7	【40】	法明院での一周忌法要	21
【12】	ビゲロウの来日	7	【41】	三井寺に帰りたい釣鐘の物語 フェノロサ先生墓碑碑文	21 22
【13】	赤松連城と仏教対話	8	【42】	遺骨の軍艦移送説	23
【14】	仏教研究ノート	9	【43】	ハイゲート墓地の記念碑	23
【15】	美術講演で仏教擁護	9	【44】	ビゲロウ、ハーバード大学で 仏教を講義	24 24
【16】	神智学への関心	9	【45】	ビゲロウ、ウインズロウ、アネサキ	24
【17】	戒律を守る	10	【46】	ビゲロウの死と法明院への分骨	25
【18】	桜井敬徳を慕う	10	【47】	ジェームス・H・ウッズ博士のこと	25
【19】	道場建設と敬徳の示寂	11	【48】	ウッズの急死、法明院の供養塔	25
【20】	フェノロサが育てた仏教者	11	【49】	おわりに	26
【21】	寺院への寄進 寺宝の保護	12		*フェノロサの著書・論文について	27
【22】	ボストンへ	12		*著者による著書・文献等紹介	27
【23】	帰国したフェノロサの抱負	13	付録1『フェノロサ美術論集』1988、目次		28
【24】	アメリカでの仏教活動	13	付録2『フェノロサ社会論集』2000、目次		28
【25】	ビゲロウ・寛良・岡倉天心	13	付録3『フェノロサ英文著作集』復刻集版目次		29
【26】	MFA 助手メアリ・M・ スコット夫人	14	『フェノロサ英文著作集』復刻集版目次		30
【27】	メアリの経歴	14	付録4日本ボストン会創立20周年記念講演 演題「フェノロサ、ビゲロウ」(要旨)		31
【28】	リジーとメアリ	15	フェノロサ：東西融合の思想 (レジメ)		31
【29】	離婚・再婚	15	付録5 フェノロサ 略年譜		33
			付録6 補遺 岡倉天心記念六角堂訪問記		34

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (I)

山口 静一

【1】はじめに

明治初期に来日し、ボストンと日本の間に橋を架ける役割を果たした3人のアメリカ人がいます。

*エドワード・シルベスター・モース

Edward Sylvester Morse、1835~1925

*アーネスト・フランシスコ・フェノロサ

Ernest Francisco Fenollosa、1853~1908

*ウィリアム・スタージス・ビゲロウ

William Sturgis Bigelow、1850~1926

このうち、フェノロサとビゲロウの2人が三井寺(正式には園城寺)法明院の墓域に眠っています。この二人がここに葬られるに至った事情については、すでに100年以上も過ぎている今日、なかなか明確には分かりませんが、今回、日本ボストン会の有志で三井寺法明院を訪ねましたので、この機会に幾つかの資料を手掛かりにしながら、できるだけ跡づけてみることにしました。3、4回連載の予定です。

【2】フェノロサ、ビゲロウの受戒

このことは『敬徳大和上畧伝』(三井寺明治24年発行)という、桜井敬徳(1834-1889)大和上第三回忌にあたって弟子の町田久成(1838-1897)が和様漢文で記し、巻頭に敬徳の肖像写真を掲げた小冊子(6ページ)の中で述べています。元老院議員であった久成は師の示寂を機に剃髪して僧籍に入り、園城寺大僧都光浄院住職の地位にありました。ちなみに久成の墓も法明院にあります。

この「畧記」の一節に「十八年九月留錫於東京小梅村町田氏宅受戒乞教者多米国人普恵廼勞佐美芸郎等亦請師受戒屢來問法義授法号美芸郎曰月心普恵廼勞佐諦信又為二信士講梵網菩薩戒經」があります。

十八年九月、巡錫中の敬徳師は東京小梅村にあった町田久成の別宅に止宿。戒を受け教え乞おうとする者が多かった。フェノロサやビゲロウらもまた師に受戒を請い、しばしば訪れて仏教法義の質問をした。師はビゲロウに「月心」の法号を、フェノロサには「諦信」の法号を授けられた。また二人の信士のために梵網菩薩戒經を講じられた、と読むことができます。

ビゲロウの与えられた法号「月心」は「月のように澄んだ心」を連想させ、フェノロサ「諦信(かいしん)」の「諦」は仏教では「真理」また「悟り」を意味します。

梵網菩薩戒經とは梵網經に説く菩薩戒ということでしょうか。菩薩戒は一般に止悪・修善・利他の三面に及ぶ戒律ですが、梵網經ではこれを具体的に十重禁戒・四十八輕戒として説いています。

二人のアメリカ人は在家仏教の信者としてこの戒律を守ることを誓い、キリスト教から改宗したことになります。「日本天台宗年表」によれば明治18年9月21日の出来事でした。

当時の新聞各紙は一斉にこのニュースを伝えました。例えば『東京日々新聞』(明治18年9月30日)「フェノロサ仏門に入る — 東京大学哲学教師フェノロサ氏は、今まで理学数理を以て世間事物の道理を講究せられたるに、最早欧米諸国の実理学を以て推度すべき丈は既に大概講究し了りたるも、其外に色心二法の実理に至りては未だ欧米学士の講究し能はざるもの数多あれば、之を究めばやと先頃より仏教を学ばるるに、大いに悟る所ありとて近頃は専ら仏教を修められ、且つ此程は天台宗寺門派の桜井敬徳阿闍梨に就きて菩薩戒を受けられたりと、本年九月三十日刊行の『明教新誌』に見ゆ」

色心二法とは物質と精神との関係を研究すること。教会に通い洗礼を受ける青年男女の多い文明開化の世相の中、欧米人がキリスト教から仏教に改宗したことは大変なニュースだったことでしょう。「明教新誌」とは当時の隔日刊仏教誌です。

【3】登場人物のプロフィール

三井寺法明院の桜井敬徳(天保5年生まれ)は明治18年現在51歳。信者に授戒できる阿闍梨の資格を得たのは30歳のときでした。厳しい修行と高い学徳で知られ、明治5年新設教部省より教導職を任じられます。教導職とは一般国民教化のために日

『フェノロサ、ビゲロウと三井寺』 つづき

本各地を巡回説法する僧侶で、これは明治17年6月の記録ですが、敬徳は中教正の地位にありました。教導職の職制は大教正を頂点として14の位階(大中少の教正、大中少の講義、訓導の3段階で、それぞれに「権(カウ)」付きの予定者を置く)がありましたので、かなり高位に属します。

現在の愛知県常滑市出身の敬徳は、尾張藩士から司法省大審院判事となった青木信寅(天保6年生まれ)と親しかったと法明院に伝えられています。信寅は明治14年10月函館控訴裁判所長官として転出、同19年9月24日同地で病死しました。法明院蔵敬徳資料の中に、明治20年付けで「法明院信徒総代、愛知県士族青木重彦、鹿児島県士族床次正精、鹿児島県士族町田久成」と、3人が自署捺印した文書が残っていますが、この青木重彦は信寅の嗣子ですので、信寅は生前は信徒総代の筆頭だったと思われまふ。床次正精(とひまきし) (天保13年生まれ)は信寅と同じ司法官僚で、東京や仙台の裁判所で検事を務めた人物です。肖像画の才を認められ、明治15年には宮内省、のちに農商務省御用掛となって博覧会関係の仕事をしました。法明院信徒総代になったのは信寅の懇意だったかもしれません。

町田久成(天保9年生まれ)がいつ、どのような経緯で敬徳と知り合ったのか実ははっきりしません。「日本天台宗年表」は、明治16年4月3日「元老院議員町田久成、法明院敬徳律師を拝し八斎戒を受く」と記していますが、久成の元老院入りは2年後ですので、これは後年の記入。敬徳自身の日誌「戒忍日志」同年5月8日の項に「町田久成居士正五位来参・・・八斎戒を伝授」とあります。「居士」と称されていること、また「八斎戒」は在家の五戒に衣食住の具体的節制を加え8条とし、出家生活に一步近づき意義をもつ戒律であることから、久成が敬徳の信徒になったのはもっと以前のことだったと考えられます。清沢満之の弟子だった大谷大学の佐々木月樵は、両者の出会いを「京都での病気が逆縁で受戒し云々」と言っていますが、具体的なことは分かりません。

わが国文化財行政の父、博物館事業の創設者だった町田久成は明治15年10月19日、農商務省大書記官博物館局長博物館長を突然解任されました。

「依願免本官」ですが理由は未だ謎に包まれていま

す。東京国立博物館裏庭に歴史学者重野安鐸(かつぶ)の撰になる久成顕彰碑があります。それには藤原藤房や熊谷直実の故事が引かれ、久成があたかも時の施策と相容れなかったことを暗示するように書かれています。

実際、文化財を「考古の徴証」として重視する久成の見解と、「殖産興業」の資として外貨の獲得を狙う政府の方針とはかなりの開きがありました。

例えばウイーン万博出品の日本物産図説をもとに政府は明治9年、殖産興業の基本として国産物品の製造課程を図説した『教草(おしえぐさ)』を博物館蔵版として出版しましたが、陶磁器、漆器、銅器、製茶、養蚕、織物、日本紙など各種産品が解説されなか、久成が詳細に紹介したのは管着圖の図に寄せた「鷹狩一覽」でした。

明治14年、久成が局長だった博物館が新設の農商務省管轄となり、翌年同省少輔として品川弥二郎(長州藩出身、天保14年生まれ)が着任、久成の上司となります。あるいは品川との間に確執を生じたのかもしれません。いずれにせよ豪放磊落、無欲恬淡で知られ、逸話に事欠かなかった人物だけに、この辞職は大いに世間を驚かせたことでした。

退官に際し政府は下賜金と共に長年の功勞を賞して従五位から正五位に叙し、翌年正倉院移管問題など久成不在では進捗不能の業務を遂行するために農商務省御用掛に再任、明治18年3月には元老院議員に任命しました。

三井寺の桜井敬徳阿闍梨を拝して受戒したニュースもまた東京の人士を驚かせました。青木信寅の函館転出後、いつしか敬徳が巡回布教中上京の際は久成の小梅村(現墨田区白鬚橋の東岸)別邸に止宿することを知って小梅村詣でをする人々が次第に多くなりました。

増上寺の福田行誠上人も訪れ蜂須賀茂韶侯爵夫人を始め、のちに内相となる宮内省の副島種臣、官を辞して実業界に入り美術事業を奨励した河瀬秀治らが小梅村で敬徳に受戒しています。文部省美術行政官でフェノロサの鑑画会活動に協力していた岡倉覚三の受戒は明治18年9月15日。その6日後にフェノロサ、ビゲロウが受戒したわけです。(続く)

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(Ⅱ)

山口 静一

【4】発端はブラキポッド

日本とボストンとの交流の発端はブラキポッドという海洋生物だったと言うと奇異に感ずる人が多いことでしょう。訳して腕足類と呼ばれるこの生物は二枚貝に似ており、殻の間からニューつと腕が伸びて三味線のような形に見えますので、日本ではシャミセン貝とかホウズキ貝と呼ばれますが、実は貝類ではなく、触手動物の仲間とされます。

このブラキポッドは太古から形態的变化がほとんどないことで知られ、進化論学者エドワード・シルヴェスター・モースは強い関心をもって研究しておりました。1874年アメリカ西海岸で採集していたとき、日本の沿岸には多種類のブラキポッドが棲息するという耳よりな情報を得てモースは日本行きを決めます。決して裕福とは言えないモースでしたが、幸い1875年に出版した動物学の教科書が好評で版を重ねたために経済的余裕もでき、1877年5月セーラムの自宅に妻子を残し3ヵ月の予定で出立、サンフランシスコから20日ほどの航海のち6月17日、横浜に来着しました。

動物学者モースの来日をTokyo Timesの予告記事で知り、期待に胸を膨らませて待構えていたのが、東京大学法理文学部の教授外山正一(とやま まさかず)(1848-1900)でした。この大学はその年4月に当時一ツ橋にあった東京開成学校と本郷の東京医学校とが合併して出来た明治日本の最高学府です。ミシガン大学出身の外山正一は在学中モースの講演を聞いたことがあり、アメリカでの名声や講義の面白さ、それに人柄の良さもよく知っていたようで、欠員だった理学部動物学の教官にはこの人を措いて他には無いという確信をもっていました。

コーネル大学出身の植物学教授谷田部良吉(1851-1899)と、文部省学監デービッド・マレーの賛同を得て外山は、初めて東京に来たモースを新橋駅に出迎え、竹橋にあった文部省に同行して、9月から新学期を迎える理学部教授への就任を要請したのです。

【5】モースの東京大学教授就任とフェノロサ推薦

デービッド・マレー(1830-1905)は明治6年ラトガーズ大学から文部省に招聘された教育学者。教育制度の整備に尽力し大臣なみの待遇を受けていた有力者です。3ヵ月後の予定も詰まっていたモースでしたが、外山、マレー、そして大学当局の熱心な説

得を断ることはできませんでした。大学は江ノ島にブラキポッドなどを採取のための実験所を設置し、またモースの見つけた大森貝塚発掘への全面的支援を約束、本郷加賀屋敷(現本郷キャンパス)の外国人教師館への入居も決まります。モースは39歳になっていました。

東京大学との契約は、同年9月より2年間理学部動物学生理学教授、月俸350円。但し11月より6ヵ月翌1878年4月まで図書・教材・標本類購入のため米国出張、その間理学部物理学、文学部政治学の専任教授を斡旋するという内容でした。月俸350円は法理文学部外国人教師の最高額で、東京大学の熱意のほどが分かります。因みに明治10年は白米が1円で26キロ買った時代でした。米国出張はもちろん予定の仕事の整理と家族を呼び寄せるための準備を考慮に容れてのことと思われる。

理系のモースにとってオハイオ大学の物理学教授トーマス・メンデンホールを推薦するのは容易でしたが、政治学は知り合いがおりません。そこでハーバード大学のチャールズ・W・エリオット総長を介して探しますが、結局同大学美術史教授チャールズ・E・ノートンの推薦するアーネスト・F・フェノロサに決まりました。ハーヴァード大学で哲学を4年間、大学院で美術史を2年間専攻した青年で、学部で専攻したハーバート・スペンサーの哲学が政治経済の進化論的發展を含む社会学や、心理学、生物学を取り込んだ総合哲学であったため、新生日本の大学における政治学講義にはあながちミスキャストではないと考えられたのでしょう。

【6】フェノロサの生い立ち

フェノロサはスペイン移民の子として1853年セーラムで生まれています。父マニュエルはスペイン南端マラガに寄港した米国フリゲート艦に友人のエミリオと共に軍楽隊の一員として乗組んだ音楽家でした。セーラムに落ち着いた二人のスペイン人はこの地で裕福なパトロンを得、市内やボストンのコンサートに出演したり上流家庭の子女にピアノやバイオリンを教えたりして漸く安定した生活ができるようになります。マニュエルに呼び寄せられた妹のイソベルがエミリオと結婚すると、両親もマラガからやってきますが、カトリックからプロテスタントに改宗した子供たちに絶望して程なく帰国したということです。やがてマニュエルも、ピアノの愛弟子

『フェノロサ、ピゲロウと三井寺法明院』(つづ)

だったセーラムの名門シルスビー家の娘メアリーと結婚、翌年アーネストが生まれエписコパリアン・チャーチで洗礼を受けます。その翌年、のちに音楽家になる弟ウィリアムが生まれました。一家は閑静な住宅地チェスナッツ・ストリートに転居。その5番館で幼い兄弟は、父のバイオリンを母がピアノで伴奏するのを聴きながら育ったと、フェノロサは回想しています。この建物は現住者アンダソン家が「フェノロサの家」のサインボードを壁に貼って保存しています。

幸せな日々はしかし長続きしませんでした。アーネスト13歳のとき母病死、3年後父再婚。シルスビー家の援助でハーバード大学に入学した兄弟は、在学中大学の学生寮で生活、アーネストは前述のように哲学を専攻して1874年6月卒業、ファイ・ベータ・カッパの会員になっていますので優秀な成績であったことが分かります。移民の子なるが故に就職の道を閉ざされたフェノロサは大学院に進学しますが、2年後大学院を終了しても就職できません。しばらく大学内のユニテリアン神学校に通ったという記録があります。スペンサーの社会進化論とキリスト教との関係について関心があったのかもしれませんが、就職に結びつくものではありませんでした。高校時代から憧れていた初恋の女性リジーとの交際も、彼女の両親から差し止められる始末です。

【7】フェノロサ来日の経緯

南北戦争が終わって10年経った当時のアメリカでは、漸く経済も復興に向かい、文化の象徴として各地に美術館が開設され、公立学校で図画が正課に組み入れられていました。フェノロサはノートンに学んだ美術史の知識を生かし、時代の要求する美術教育家ないし美術評論家として身を立てる決意を固め、開設早々のボストン美術館に付設された絵画学校に入学して美術解剖学や実技を学び始めました。と言っても特に目途があったのではありません。リジーの両親の危惧はまさに的中していました。鬱々たる日々を送るフェノロサに、ある日とんでもない事件が起こりました。

父マニュエルの自殺です。再婚して3人の息子を儲け、市内に楽器店を営んでいるながら1878年1月、突然セーラムの海に謎の投身自殺を遂げたのです。キリスト教社会では自殺は道徳的罪悪として指弾される行為でした。

この絶望的状况からフェノロサを救ったのがモースからの朗報でした。フェノロサに会ったモースが



玄智院明徹諦信居士

法明院 フェノロサ祭壇

まず話題としたのは高額なサラリーのことでした。半額を貯金しても「貴公子のような」生活ができること、契約は2年だが更新が可能なこと、フェノロサの風貌は学生を魅了するであろう、帰国後も著作と講演によって生計を立てる道が開けるであろうと保証します。鎖国の扉を開いて間もない新興国日本で、近代化の熱意に燃える学生たちに西欧思想を伝えることは、それまでの勉強を最大限に生かせる仕事に思えました。フェノロサは再び進路を転換します。

同年4月になって東京大学から招聘の通知が届きます。教授の地位と莫大な俸給の明記された契約確認書はフェノロサを狂喜させました。月俸3000円は当時のレートで280ドル。25歳の青年には考えられない程の高給でした。

フェノロサは何度か諦めかけていたリジーに自信をもって結婚を申し込み、6月12日セーラムの教会で結婚、7月20日新婚旅行を兼ねた形でサンフランシスコから日本に向かいました。乗船したCity of Peking号の一等船客名簿に Professor E. F. Fenollosa and wifeと署名しています。

8月9日横浜着。10日東京大学にて契約書にサイン。9月から文学部の政治学(Political Philosophy)のほか理財学(Political Economy)と哲学(History of Philosophy)に加えて、大学予備門の経済学初歩まで担当することを快諾。講義は順調に開始されます。11月、予備門経済学担当の前任者江木高遠に依頼され、江木学校主催の市民講座を引き受けますが、主題は「宗教沿革論」という、痛烈なキリスト教批判でした。(つづく)

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

フェノロサ、ビゲロウと法明院 (Ⅲ)

山口 静一

【8】明治初年の宗教環境

ここで明治初年の宗教事情を概観しておきましょう。ご存じのように明治初年は、膨大な数量の仏像仏画や古建築など貴重な文化財を失う結果となったいわゆる廃仏棄釈の嵐が吹きまわった時代でした。しかしこれは明治政府が強制した命令ではありませんでした。王政復古が重要なスローガンだった新政府は、従来の神仏混淆の風習を廃し天皇家の先祖を祀る日本古来の神道を復権させるために「神仏判然令」を公布したのですが、各地の藩知事たちがこれを拡大解釈し武力によって寺院の破壊統廃合を強行したのです。民衆がそれを許容したのは、それほど仏教積弊の墮落が目に見えるほどだったのでしょう。

しかし、16世紀宗教改革後のカトリック教会のように、覚醒した新進仏教徒、仏教指導者の活躍は目覚ましいものでした。ヨーロッパやインドに渡航して仏教を研究し、帰国して日本仏教の革新に尽力した僧侶たちに、島地黙雷、石川瞬台、南条文雄、藤島了穂、赤松連城その他多くの人が輩出しています。

一方キリスト教の方ですが、新政府がキリシタン禁制の高札を撤去したのはようやく明治6年、それも信徒迫害に抗議するヨーロッパ列国の圧力によるものでした。それまで、来日した欧米の宣教師たちは、ヘボン博士やジェームズ・バラのように、公的には医師として、あるいは英語教師として密かに伝道に従事するだけでしたが、それでも彼らの人格に感化されてキリスト教に改宗する日本人が日を追って増えて行きました。

改宗者の増加を恐れた政府は、「なりふり構わず」の表現が妥当と思われるが、神道と仏教の大同団結を図ります。本来は神道国教化を目指して明治5年教部省は大教院を設置、「三条の教訓」(敬神愛国・天理人道・皇上奉戴)に則って国民教化のための教導職制度を設けていました。全国の神官と僧侶が教導職に任じられ、その職制には「教正」「講義」に大中少およびそれぞれに次位を表す「権」の字のつく12の職階(大教正、権大教正、中教正、権中教正など)と、さらにその下に「訓導」があったようです。大教正には伊勢神宮祭主や出雲大社宮司、寺院側からは各宗派の管長や法主が任命されています。国民教化の説法はもともと僧侶の得意とするところで神官の仕事ではありません。当然ながら神職と僧

侶の所説は矛盾するところが多く、2年後には両者の対立によってこの制度は廃止されますが、仏教側ではその後10年以上にわたって、教正、講義等の呼称を残し、キリスト教蔓延防止の説教活動を続けました。

後述するフェノロサ、ビゲロウの師、三井寺法明院の住職は、明治17年6月の仏教新聞に「桜井敬徳中教正」として報道され、廃寺となった伊勢の小寺を再興した浄土僧は明治24年の再興記録に「中講義大江学翁」と自署しています。

【9】モースの進化論講義とクリスチャンの反発

しかしながらモースの来日した明治10年前後には全国各地に教会やミッションスクールが出来、プロテスタントとカトリックを問わず、病院、養育院といった社会事業を通して教勢は拡大し、改宗者が増え続きます。

西洋人がキリスト教を説くのは当たり前、これも文明開化のしるしと考えていた一般市民を驚かせたのは、モースのキリスト教批判でした。ダーウインの信奉者だった動物学者モースの進化論講演は、アメリカでも保守的なキリスト教徒から妨害や嫌がらせを受けていたため、穏健な人柄ではありましたが、彼らに対しては辛辣な言葉で応酬することが多かったと伝えられています。モースが隅田川に臨む浅草須賀町の井生村楼(いぶむらろう)という会場で江木学校主催の市民講座「動物変遷論」4回連続講演を行ったのは明治11年10月のことでした。

私立江木学校の主宰江木高遠(1850-1880、注記参照)は高名な儒学者江木鱗水の嗣子。米国留学から帰国して東京英語学校およびその後身の東京大学予備門教師を務め、フェノロサ来日まで経済学を担当しておりました。留学中に知った市民講座の開設を企画し、福沢諭吉、西周、藤田茂吉、菊池大麓、加藤弘之、中村正直ら当代一流の文化人を擁してこの年「江木学校講談会」を組織します。モースが講演を依頼されたのは、前年10月東京大学主催の進化論特別講義が聴講者に与えた感銘を一般市民にも伝えるのが目的でした。通訳は江木と菊池が務めています。その要約が『芸術叢誌』という雑誌に連載されています。

動物進化の過程を卑近な実例で示しながらきわめて平易に解説し、両手を同時に使って黒板に図解するなど、モースの人気は一気に高まり、毎回満員の盛況だったと伝えています。

人類の進化について聖書「創世記」の記述を真っ向から否定するモースに対して執拗に反駁したのは、

イギリスの宣教医で築地病院を開いたヘンリー・フォールズでした。後に土器に残された指紋に示唆されて指紋を研究し指紋法の基礎を築いた人です。彼は講演中のモーリスに反論を試みましたが、主催者から「ここは議論の場所ではない」とたしなめられ、後日銀座で弁駁論を披露することになります。キリスト教をめぐる西洋人同志の争いは、日本人聴衆にとって実に興味深い一幕でした。『芸術叢誌』はフォールズをからかって

「・・・いづれ天主がこう言われたとか、耶蘇(ヤソ)が然か考えたとか、証拠もなく形跡(あと)もない空中の楼阁へ登って痴夢(ゆめ)の判断を講釈することなるべければ、無鉄砲に面白い事なるべし。この面白連中が世間に沢山なるは嘆息々々」と書いています。進化論の「自然淘汰」「適者生存」の説は、様々な疑問を解く、まことに説得力のある新知識でしたが、この文章には宣教師を揶揄しキリスト教の普及を懸念する当時の知識層一般の空気が感じられます。

【10】フェノロサの宗教沿革論とキリスト教批判

モーリス講演最終日の日に『芸術叢誌』はフェノロサを紹介し、進化論を常に攻撃する宗教といえども幾多の変遷あって今日に至っている事実について「モルリス氏の友人哲学教師米国フェノロサ氏」に講演を依頼した旨を報じています。新任のフェノロサも2週間ほど前、大学主催の定例講演会で「社会進化論の諸問題」と題する所論を発表しておりました。井生村楼の江木学校で「宗教ノ起源及ビ沿革論」の4回連続講演を開始したのは明治11年11月2日のことです。

その「傍聴記聞」が同じ『芸術叢誌』(Nos.26-40)に連載されます。まず未開人の靈魂観から発生した死と再生に関する観念を説明して天国と地獄の思想、墳墓の意義などに及び、靈魂崇拜が儀式と祭祀を生み出して一つの宗教に成長する過程を、主としてスペンサーに拠りながら多くの新鋭社会進化論学説を援用して解説したもので、啓蒙的ながら蘊蓄をきわめた講演でした。

しかしキリスト教批判に関しては、ほとんど挑発的と感じられるほど辛辣なものでした。キリスト教が如何に近代学術の自由な発展を阻害したかという告発に始まり、キリスト教の説く天地創造、人類の墮落、原罪観、救世主の出現等をことごとく迷信愚説と断じ、キリスト教が本来、未開人種に見られた靈魂再生の信仰から強大なる人物の靈に対する祭祀へと推移したものがその起源であることを証明しよ

うとします。結論として、キリスト教の神は、実はカナン地の暴君が神格化したものと断言します。要するにこの「宗教沿革論」はキリスト教絶対の観念に対する大胆率直な批判、きわめて意識的な反発に終始していると言っても過言ではありません。

フェノロサをこれほどのキリスト教批判に駆り立てたものは何だったのでしょうか。もちろん前回のモーリス講演を補強する意図のあったことも考えられますが、やはり、ハーバード時代に専攻したスペンサーの社会進化論が本源にあったのではないかと。

スペンサーは未開人に見られる宗教の変遷を説いても、キリスト教には沈黙を守っていました。哲学科を最優秀の成績で卒業した若き学徒フェノロサは大学院に進学しますが、一時大学内のユニテリアン神学校に通った記録があります。おそらくこの問題を解決するためだったと考えられます。しかしスペンサー宗教論の当然の帰結は、ダーウィンの進化論と同様キリスト教批判は避けられないものでした。

モーリスは少年時代、兄の葬儀のときの牧師の説教や厳格なクリスチャンだった父親への反抗から、キリスト教には反感を抱いていたとモーリスの伝記作者は伝えています。フェノロサの場合、スペイン移民でカトリック教徒だった父親は、セーラムに落ちてからプロテスタントに改宗した人で、少なくとも熱心なクリスチャンだったとは思われません。しかし、フェノロサがとくに反キリスト教的な家庭環境に育ったという記録は見つかりません。或いは死んだ母親の実家との複雑な関係が信仰問題にまで絡んだものかもしれませんが、これも証拠はありません。

いづれにせよ、西洋人による反キリスト教演説を、諸手を挙げて歓迎したのはいわゆる「耶蘇教退治」に躍起になっていた仏教界でした。フェノロサは明治15年の龍池会演説「美術真説」を機に、日本伝統美術復興運動の旗手として全国にその名を知られるようになりますが、この「宗教沿革論」によって仏教者の間でも忘れられぬ存在になりました。11年後の明治22年、『日本之教学』という博文館発行の雑誌にこの宗教論の前半部が収録されたほどです。

(つづく)

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

(注記：「進化論」の通訳をした江木高遠はモーリスとたいへん親しくなりましたが、明治13年3月外務省書記官としてワシントンの日本公使館に赴任しました。モーリスが東京大学との契約満期で帰国した半年後のことです。ところが同年6月公使館で謎のピストル自殺を遂げました。日本産品の輸入をめぐる差別を在米日本商社から糾弾されたのが原因とする資料があります。あるいはモーリス蒐集陶器の輸入に関与する事件だったかもしれません。)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (IV)

山口 静一

【11】 フェノロサ、日本美術への傾倒

政治学教授として招聘されたフェノロサに、大学当局は理財学(経済学の旧称)と哲学の講義も依頼しました。スペンサーの総合哲学を専攻したフェノロサは、最新の社会進化論学説を紹介して Political philosophy を、J.S.ミルらの経済学説を解説して Political economy を講義し、またシュブエーグラの哲学史(英訳本)によって西欧思想史を教え、向学心に燃える学生たちを大いに満足させました。初期の教え子たちに井上哲次郎、岡倉天心、嘉納治五郎、高田早苗、市島春城、坪内逍遙らがいます。

美しい花鳥画をおみやげに買って帰国する他のお雇い外国人と同様、フェノロサも人気ある画家の作品を買っていましたが、やがてその買い方が他の外国人とは異なってきました。好きだから買う、良いから買うのではなく、いかにも社会進化論学徒のように、画家の流派・系統を追って購入するようになったのです。これは来日して二年足らずのことで、学生だった天心や有賀長雄がその方面の調査の手伝いをしています。

明治13年の夏休みには古美術蒐集のため卒業直前の天心を通訳に同行して関西旅行をするほど研究が熱を帯びてきました。翌年には美術史研究の成果が現われ、一流の蒐集家・古画鑑定家として知られるようになります。(十月二十四日『東京日々新聞』)

フェノロサは来日当初、二期4年間の東京大学在職を予定していたようです。しかし明治15年以降国粹主義的思潮に乗って美術行政も西洋画推進から日本美術復興へと転換し、フェノロサはその運動の牽引役としての留任が望まれます。フェノロサ自身、月給300円という莫大な俸給は手放したくはなかったでしょう。(4年後の明治19年には大学から文部省・宮内省に転職、名実共に美術行政官になりました。)

【12】 ビゲロウの来日

明治15年6月には、3年前東京大学理学部を満

期退職したモースを伴ってボストンの富裕な美術蒐集家ウィリアム・スタージス・ビゲロウが来日しました。陶器蒐集家のモースは半年ほどの滞日後ヨーロッパ経由で帰国しますが、ビゲロウはその後8年間、フェノロサと共に蒐集活動を続けます。フェノロサは古画専門でしたが、ビゲロウは仏像、浮世絵をはじめ根付、鐔、舞楽面から能衣装まで、日本美術全般にわたるものでした。これらが現在のボストン美術館(MFA)日本美術コレクションの中核となっています。

ビゲロウは、祖父がMITの創設に関った医学者、父はハーバード医科大学教授で大統領の侍医というボストン名門の医家に生まれました。フェノロサより3歳年長です。大学卒業後ヨーロッパに留学、パリのバスターール研究所等で細菌学を専攻しましたが自ら医学者に不適と考へ、莫大な資産を美術品蒐集に充ててはMFAに寄贈を重ね、総計5万点に及んだといひます。ちなみに、MFAのフェノロサ蒐集品は1千点余りでした。

モースやフェノロサを説得し、蒐集品を将来ボストンに集めMFAを日本美術の府たらしめようと提案したのもビゲロウでした。約束を守ったモースは、時価10万ドルの値のついた日本陶器コレクションをMFAの募金による7万6千ドルで納入、フェノロサもコレクションをウエルド(Charles Goddard Weld, 1857-1911 明治18年訪日の蒐集家)に譲渡する際、MFAへの寄託と遺贈を条件としました。(これは余談ですが、一説に25万ドルと言われたフェノロサの売却金はその後どうなったのでしょうか。文部官僚だった木場貞長(1859-1944)が退官後の回想に、「惜しげもなく某所に寄贈された」と記しているのが気になっています。)

フェノロサの蒐集品中すぐれて美しいのが平安佛画でした。「普賢延命菩薩像」「馬頭観音像」「如意輪観音像」などは、ビゲロウ蒐集の「法華堂根本曼荼羅」(奈良時代)、西智作「聖観音坐像」(鎌倉時代)とともにMFA蔵品の白眉と言える名品です。このような作品を生んだ仏教に、二人は当然関心をもったに違いありません。

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(IV) 続き

【13】 赤松連城との仏教対話

赤松連城(1841-1919)。浄土真宗本願寺派の僧侶で島地黙雷とともに本山の改革に当たり、明治8年、2年8ヶ月に及ぶイギリス留学から帰国後は宗門教育の改革に尽力、のちに大学林総理・仏教大学長・執行長など宗門の要職を歴任した人物です。英語に堪能なところから、関西古社寺探訪のフェノロサ、ビゲロウとは親しい間柄になっていました。

明治17年11月30日(日曜日)のことです。上京中の赤松連城が神田駿河台のビゲロウ宅を訪れたとき、たまたまフェノロサがやってきました。「その声はアカマツではないか」と言いながら部屋に入ったフェノロサは、京都で会って以来の近事を話した後「せっかくの機会だから我が家へ来ないか」と、本郷加賀屋敷の大学教師館(現東大本郷キャンパス建築科付近にあった)に二人を招きました。昼食後、話は哲学のことに及びます。

フェノロサが「ヨーロッパの哲学のなかで、自分はヘーゲルの物みな三個相依って成るの理(弁証法の正反合三段階論理)を信奉している」と述べ、「神があれば魔があり、もしこの二つのみならば終始相戦わざるを得ぬわけだが、第三位に前の二者を統合したより高い判断があって、その宜しき得ることができる」と解説します。

すると連城師は、仏教でも、有空中(ウクウチュウ)の三時、空仮中(クウケチュウ)の三諦(サンダイ)、また遍計所執性(ヘンゲシヨシユウシヨウ)・依他起性(エタキシヨウ)・円成実性(エンジョウジツシヨウ)の三性の教理のあることを紹介し、「ヘーゲルの物みな三を以って成るとの説は、例えば宗教(一)と学術(二)とを合成統一するものが仏教(三)ということになりませんか。また勢至菩薩は知恵を、観音菩薩は慈悲を司りますが、この知恵と慈悲とを兼有するのが阿弥陀如来と説くのは浄土真宗の常識です。これも三を以って成るの理に当たるのでは」といいますと、フェノロサは手を拍って「仏教には既にそのような高尚な説があるとは知らなかった」と大いに嘆賞します。

連城はフェノロサに、是非仏教を研究して哲学者の公平な立場からキリスト教との優劣を判定して欲しいと要望し、さらに語を継いで「本地垂迹(ホンジ



聖観音坐像(鎌倉時代・滋賀県金剛輪寺旧蔵)
ボストン美術館蔵(ビゲロウ コレクション)

スイジャク)の説を紹介しました。まず「空気が膨張すれば圧力を生ずるという原理(プリンシプル)が本地、これによってジェームズ・ワットが蒸気機関という形(フォーム)あるものを発明したのが垂迹」と解説した後、「慈悲の理があって観音菩薩という迹を生じ、知恵の理が勢至菩薩の迹を生じたもの。かの千手観音は一見奇つ怪な像容ですが、これは百能具備の理と慈悲の理によって遂に柔和忍辱の容貌と千手の迹を現したもので何ら怪しむにあたりません。」

フェノロサは再び手を拍って驚き、そのようなことを仏教は説いているのか。あなたはアリストテレスを学んだことがあるのかと尋ねます。連城が首を振ると「プリンシプルからフォームを生ずるという本迹の説はまさにアリストテレスの哲学の説くところ。仏教にこの説あるとは、今まで聞いたこともなかった」とさらに驚嘆して止みませんでした。居合わせたビゲロウも同様だったと思います。(以上は明治十七年十二月発行『万報一覽』第54号の「学術教育」欄に掲載された記事です。)
(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (V)

山口 静一

【14】仏教研究ノート

ヘーゲルやアリストテレスを想起させる仏教に、二人は余程驚嘆したのでありましょう。日ならずして講師を雇い、熱心な仏教教理の研究が始まりました。1885年(明治18年)6月27日の日付を記したフェノロサ筆仏教研究ノートが残っています(ハーバード大学ホートン・ライブラリー蔵)。

内容は仏教教理、特に「四種法身(シシユホッジン)」「五転(ゴテン)」「十縁生句(ジュウエンジョウク)」「遮情門と表徳門」など密教の基本的概念を述べた入門書をテキストに、おそらく講師の英訳解説を20ページにわたって筆記したのですが、テキストも解説者の名前も不明です。「十縁生句」中の「虚空華(コクウガ)」をシヨクウガ(虚空華)と読み違えた箇所などがあり、あるいは講師は専門家ではなく有賀長雄など教え子だったとも考えられます。

注目すべきは「五転」の説の最後すなわち「方便究竟(ホウベンクギョウ)」の部分です。「方便すなわち真実の教えに導いて他を利するため、ブツは如何なる異教の姿も取り得るとする真言行の最高段階」という講師の解説を筆記したフェノロサは、ノートの余白に「キリストもまたブツダの化身のひとつたり得る」と書き加えているのです。これは仏教を哲学として理解した以上にフェノロサにとっては大きな発見でした。

【15】美術講演で仏教擁護

このころのフェノロサとビゲロウは、狩野芳崖や文部省の岡倉天心らを加えて「鑑画会」という日本画家を育成・激励する組織を作っていました。会員の新作展示とフェノロサの美術論講演が主な活動で、古画の模倣に終始する農商務省系の「龍池会」に対抗する組織でした。

仏教研究ノートを取る以前の5月4日、フェノロサは京橋日吉町のホールで催された鑑画会の例会で、宗教と美術の関わりについて演説しています。通訳は有賀長雄でした。日本の美術が西洋模倣と旧弊盲従とを克服し新しい明治の美術を追求すべきであること、宗教もまた非妥協的なキリスト教の蔓延を防止し、旧態依然たる仏教を改革しなければならない、というのが講演の主旨でした。ここで彼は、キリスト教が知的性格に弱点を持ちながら実践道徳面に強く、逆に仏教が実践道徳面に弱点を持ちながら知的理念に強いこと、従ってキリスト教が知的完全さを求めれば仏教に近づき、仏教が道徳的完全さを目指せばキリスト教に近づくという興味ある見解を示しています。

当時耶蘇教と対決していた仏教徒たちにとって、このフェノロサ所論は西洋人による貴重な仏教優越論と映ったようです。翌月の仏教雑誌は「画題に仏教を用ゆるの得失」の見出しで直ちにフェノロサ演説の大意を紹介しています。「……耶蘇教も今一層進化せば必ず仏教の如くなるものならんと思うなり。然れば日本将来の宗教は唯一の仏教あるのみ。たとい耶蘇教あるも結局仏教の範囲内にありて運動するものたるに過ぎざるなり云々」(『令知会雑誌』)。この記事は翌年9月の仏教雑誌『教学論集』にも再録されたほどでした。

【16】神智学への関心

これはフェノロサ、ビゲロウの受戒後、明治19年1月刊『令知会雑誌』に掲載されたのですが、「耶蘇教を捨て仏教に帰依した理由」について南条文雄(ぶんゆう)と平松理賢とが質問しビゲロウが答えた記事が出ています。

ビゲロウは数項目に亘って両者を比較しました。仏教が「哲学」であり自然科学にも背馳しないことなどを挙げた後、ひとつの注目すべき発言をしています。原文をそのまま紹介します。

“……仏教中には世間幾多の学問以外に一の別路を開けり。その別路とは人の思想を読む術(即ちソートリーディング)、次に動物電気術、次に神智学等の事を完全したる者なり。”

耳なれない言葉が続出しますが、「人の思想を読む術」とは1880年代欧米で関心を集めていた「テレパシー」のこと、「動物電気術」とは「動物体内に発する一種の電気作用」によって人を「催眠状態」にすること(昭和10年平凡社『大辞典』)です。いずれにせよこれは、ビゲロウが密教のオカルト的要素に強い関心を抱いていたことを物語っています。

また「神智学」(Theosophy)ですが、これは本来「神秘的・直観的靈智によって神を体験・認識しようとする(大辞林)」もので、西洋には古くからあった神秘説でした。しかしビゲロウの言及した神智学は、1875年ブラヴァツキ夫人(Helena P. Blavatsky, 1831-1891)がオルコット(Henry Steel Olcott, 1832-1907)と共にニューヨークに設立した神智学協会(Theosophical Society)という教団のことです。その後教会本部はインドに移り、仏教やヒンドゥー教から輪廻(りんね)、業[カルマ]、解脱(げだつ)等の教義を採用して教団は著しい発展を遂げ、各国の信徒は10万人に及んだと言います。

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(V)(つづき)

身口意(シン・ク・イ)三密の修行によって大日如来との合一を達成し、「即身成仏」を得ると説く密教こそ、テレパシーの秘密も、宗教的恍惚状態の謎も解明し、神智学を完成させるもの、とビゲロウは考えたのでありましょう。

オルコットは「西洋の仏教徒」として明治18年に日本に招かれ、仙台、東京、山口などを巡廻講演しましたが、大乘仏教と違ってオカルト色の濃いその説教に日本の仏教者たちはかなり戸惑いをもって接したようです。

【17】戒律を守る

フェノロサ、ビゲロウが三井寺法明院の桜井敬徳〔教導職中教正〕に受戒した明治18年9月21日は、上記ノート取って3ヵ月後のことです。町田久成の小梅の別邸で受戒したことは拙文〔本誌第30号、07年10月〕の冒頭で述べた通りです。同年9月1日に「教用にて此の程出京」〔『東京日日新聞』〕した敬徳阿闍梨を二人はしばしば小梅に訪れては仏教教学に関する質疑を重ね、遂に21日の受戒に至ったものです。

受戒とは仏門に入ろうとする人が仏法の戒律を遵守することを誓う儀式です。フェノロサの受けた戒律は「菩薩戒」、ビゲロウは「十善戒」でした。

「菩薩戒」は「梵網戒」とも呼ばれ、十種の重禁戒と四十八の輕戒から成り、前者は殺生、偷盜、邪淫、虚言、酒の売買、誹謗、吝嗇などの重罪、後者は飲酒、食肉、食五辛、蓄殺生具、貪財惜室など比較的輕微な罪に対する戒めです。

フェノロサはそれまで酒を嗜み、ピフテキを好み、旅行中は護身用にピストルを携行していたという記録もありますが、以後肉食を絶ち〔『東京日日新聞』同年11月25日記事〕、おそらく武器携行もアルコールも控えたことでありましょう。

またビゲロウの「十善戒」は不殺生・不偷盜、不邪淫・不妄語、不綺語、不悪口・不両舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見という在家信者の守るべき10種の戒律で、「梵網戒」の十重禁戒と大きな違いはありません。

受戒した二人がそれぞれ諦信(たいしん)、月心(げつしん)の法号を授けられ、敬徳が二人のために梵網菩薩戒經を講じたことも記述しました。

【18】桜井敬徳を慕う

仏教教理以上にフェノロサ、ビゲロウを惹きつけたのは桜井敬徳の高潔な人格でした。二人は慈父を慕う子供のように師を敬慕しました。後にフェノロサは長詩『東と西』(1893年)の中で敬徳を「白衣の僧」として登場させ琵琶湖の湖畔天台宗三井寺の敬徳阿闍梨を、最も靈感に満ち、また誠実に惜しみなく宗教上の事柄を教示された



桜井敬徳阿闍梨肖像

町田久成著『敬徳大和上畧傳』口絵より

我が師として、私は今でも崇敬してやまない。京都、奈良、また日光の近傍で師と共に過ごした日夜は実に貴重なものであった。師こそはまさに、精神界に於ける騎士道の、崇高なる生ける規範であった。1889年、師はこの世を去った〔『東と西』自註より〕と追憶しています。

フェノロサは欧米出張中(明治19年10月より1年間、ビゲロウ同行)も敬徳との文通を中断していません。明治21年の政府による三井寺宝物調査の折り、フェノロサは岡倉天心と共に法明院を訪れて敬徳の法話を聴き、大津名物の精進料理をご馳走になった上、数日間止宿したと敬徳は日誌に記しています。法明院はフェノロサにとって、すべての俗事を忘れ清浄な雰囲気の中で心を休める別天地となりました。

公務に縛られることのなかったビゲロウもしばしば法明院を訪れ、また敬徳を東京に招いて教理上の疑問を質しました。ボストン美術館(ビゲロウは後にその理事になっています)とハーバードのホートン・ライブラリー、及び法明院には、それぞれ数通の書簡が資料として保存されています。いずれも質疑応答の手紙で、翻訳は岡倉天心か弟の岡倉由三郎が引き受けています。

(次号につづく)

フェノロサ、ビゲロウと法明院(VI)

山口 静一

【19】道場建設と敬徳の示寂

明治22(1889)年5月26日、敬徳は月心ことビゲロウの紹介で米国人フォスター(Charles A. Foster, 1850-?, 横浜繋留中の米国軍艦オマハ乗組)に十善戒を授戒し天心の法号を与えています。場所は町田久成の別邸ではなく、寛永寺(天台宗)の子院、上野の護国院でした。

裕福なビゲロウは同年春から、敬徳の東京における伝道教化の場として小石川久堅町(現東京学芸大学付属竹早小学校のあたり)に円密道場の建設を始めていました。円密とは天台宗と真言宗のこと。三井寺(天台宗)ばかりでなく真言密教への関心の深さが偲ばれます。フォスターの受戒は、新伽藍未完成のため、護国院の古道場を借りたものでした。

しかし、同年12月24日、体調不良のため日光から戻って療養中の敬徳は、フェノロサ、ビゲロウの懸命の看病も空しく、竣工直前の新道場で逝去。享年56歳でした。

急を聞いて駆けつけた弟子直林寛良(後の法明院阿闍梨敬円、第156代園城寺長吏になった人)によって遺体は天津に運ばれ、法明院墓域に葬られました。元老院議員だった町田久成にとっては、これを機に剃髪し僧籍に入ったほどの衝撃でした。

フェノロサは翌23年6月、契約満期を以って文部省(東京美術学校幹事)・宮内省(帝国博物館理事)を辞任、翌月家族と共に帰国します。同時にビゲロウも帰国してボストン美術館理事に就任、フェノロサは新設日本美術部のキュレーター(5年契約)として自ら蒐集した美術品を管理することになります。

円密道場はその後岡倉天心が校長になった東京美術学校に移築され、職員や学生のクラブとして利用されていましたが、戦後に取り壊され、現在その跡が東京芸術大学美術館になっています。

【20】フェノロサが育てた仏教者

前述のように市民講座「宗教沿革論」はキリスト教の拡大に対抗する仏教界の強力な助勢となり、またビゲロウと共に始めた仏教研究や美術講演での仏教擁護論は一般市民にも温かく歓迎されましたが、フェノロサは大学の講義でとくに仏教を鼓吹したこ

とはありません。しかし学生の中から二人の偉大な仏教者が現れました。井上円了(1858-1919)と清沢満之(1863-1903)です。

井上円了は新潟県来迎寺村(現越路町)の慈光寺という浄土真宗大谷派の寺に生まれた人です。新潟英語学校在学中に京都の本山東本願寺に呼ばれ、将来僧侶養成の教師学校教授となるため、給費留学生として東京大学に派遣されました。東京大学予備門(大学と同じキャンパスにあった3学年制の予科)に入学したのが明治11(1878)年、20歳。フェノロサの来日と同じ年でした。この年フェノロサは予備門で経済学を兼担していましたので、入学早々フェノロサの警咳に接したことになります。廃仏棄釈の悲劇を体験していましたので、「宗教沿革論」をも当然熱心に聴講したと思われます。

文学部に進学し哲学を専攻した円了にとって、フェノロサのスペンサー、カント、ヘーゲルの哲学講義はまさに眼を開かれる思いでした。語学ができないため、或いは学資がないため大学に入れなかった人たちに開かれた学校を作りたい、これが円了の切実な願いとなります。

明治18(1885)年7月大学を卒業した円了は、俗界に在って布教に努めたいと本山に懇請して京都に戻らず、本郷に私塾哲学館を開き友人たちの協力を得て授業を開始します(明治20年9月)。これが現東洋大学の発祥でした。授業の主体は哲学と政治学と理財学。初期東京大学文学部でフェノロサが担当した学科と全く同様のカリキュラムでした。

明治20(1887)年7月帝国大学文科大学(前年3月東京大学文学部改称)哲学科を卒業した清沢満之まんし(旧姓徳永)も、東本願寺から派遣された留学生でした。お寺の生まれではありませんでしたが、縁あって東本願寺育英学校に在学していた人です。予備門を経て明治16年大学哲学科に進学。フェノロサ(明治19年大学退任)には哲学、論理学、社会学、審美学を学んでいます。大学院在学中、哲学館に出向して井上円了を助けましたが、円了とは違って本山に戻り、宗門の教育と改革に生涯を捧げました。仏教における近代的信仰の樹立者として、キリスト教の内村鑑三と並び称される人物です。

明治30年満之は41歳の若さで病死しましたが、晩年真宗大学(現大谷大学の前身)の学監だった頃、二度も三度も「フェノロサ氏を米国から招こうか」と言われたと、これは満之門下の学僧で後に大谷大学学長になった佐々木月樵の回想です。フェノロサの講義は満之にとってそれほど印象の強いものでした。満之と円了とは共に、詳細なフェノロサ講義のノートを残しています。

『フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (VI)』

【21】 寺院への寄進 寺宝の保護

ボストン美術館所蔵品のうち、もし日本に在れば間違いなく超国宝級に数えられるのがビゲロウの入手した「法華堂根本曼陀羅」と呼ばれる奈良時代の釈迦如来説法図でありましょう。これは東大寺三月堂(法華堂)の本尊でした。仏像では鎌倉時代の名品「聖観音坐像」、湖東三山の一つ金剛輪寺の旧蔵です。フェノロサも「馬頭観音」「普賢延命菩薩」など美しい平安仏画の数々を購入しています。鎌倉時代の「四天王図」は廃絶した永久寺真言堂(天理市)の障子絵でした。

両人の蒐集目的は将来ボストン美術館を日本美術の宝庫にすることでした。これは明治15年夏、モースと共に蒐集旅行をした時の3人の誓いでした。当時の寺院は廃仏棄釈の嵐に襲われて貧窮を極め、伝来の宝物を手放さざるを得ない状況でしたので、仏像仏画の蒐集は比較的容易だったのです。

しかし当初からこれらの保全を願う気持ちも強かったようで、フェノロサが京都東福寺に寄進して寺宝を修復させたのは明治13年、最初の関西旅行の時でした。明治17年の法隆寺調査の際、ビゲロウはフェノロサと相談し、巨勢金岡筆と伝える破損した花鳥画などを自費を投じて修復させた記録もあります。余談ですがこの年法隆寺夢殿開扉事件があったとされていますが、これは岡倉天心の記憶違いによるもので、法隆寺の記録から推してもフェノロサの証言によっても、明治19年とするのが正しいようです。

明治21(1888)年夏、政府は宮内、内務、文部の三省合同の大規模な関西古社寺宝物調査を実施しました。首班は九鬼隆一。古美術に精通したフェノロサは顧問格で指導的役割を果たしました。調査の様子は連日各新聞が報道しましたが、とくに同行したビゲロウの「義挙」が話題を提供しています。巡回する寺院には「仏前へ種々の美香を供え」、修復を必要とする品には「修繕料として金五十円或いは百円を寄付せし所少なからず」といった具合で、そこには明らかに仏教徒としての意識が窺えます。

援助を受けた寺院が何処であったのか、現在は唐招提寺、桜井市の聖林寺以外は不詳です。フェノロサはすでに明治19年に聖林寺を訪れ秘仏であった「十一面観音立像」(国宝、奈良時代)を開扉していました。同21年6月調査団一行と共に再訪。このとき観音像の御厨子が腐朽しているのを見て、ビゲロウはフェノロサと連名で金50円を寄進し厨子を新造させます。

新しい厨子は秋に完成。火災のとき背後の土間に

容易に引き出せるように設計されていました。現在観音像は鉄筋コンクリートの観音堂に安置されていますが、復元された御厨子が本堂に飾られています。

調査旅行中、同年6月5日フェノロサは奈良三條通りの淨教寺を会場に「奈良の諸君に告ぐ」と題する講演会を開き、またビゲロウは8月17日京都室町の宝錦舎で講演しますが、いずれも市民に仏教文化財の重要性とその保護の必要性を訴えるものでした。

【22】 ボストンへ

帝国大学(明治19年東京大学改称)から4ヵ年契約で文部省(宮内省兼任)に転出したフェノロサは、岡倉天心と一心同体となって欧米美術事情の視察、関西古社寺の宝物調査、東京美術学校の創設という美術行政官としての大任を果たし、明治23(1890)年6月契約満期となって帰国、9月からボストン美術館(MFA)に勤務することになります。勅任官待遇、年俸6000円は各省次官級の給料で、フェノロサとしては当然契約の更新を望んだのですが、美術学校年間経費1万2000円の中からフェノロサの給料を支払うのが美術学校開設の条件であった以上、翌年から校長になる盟友の岡倉天心も、その希望には添いかねる立場にありました。事実フェノロサの去った後7人の専任教官を雇うことができたほどです。

当時のMFAは現在地よりずっと都心に近いカプリ・スクエアにありました。1876年に開館して以来富裕市民の寄贈、寄託によってコレクションは次第に増強され、とくに日本美術の発展は目覚ましいものがありました。MFA寄託を条件にウエルドに譲渡された旧フェノロサ・コレクション、ビゲロウの寄託品・寄贈品など3000点余りの絵画を管理するため、新たに日本美術部を開設することになり、フェノロサがキュレーターに指名されることになったのですが、日本美術部新設もフェノロサ指名も、実はビゲロウの影響力によるものと考えられます。ビゲロウの父(Henry Jacob Bigelow)はハーバード大学医学部教授でMFAの理事でした。ビゲロウ自身も父を継いで1890年以来終生理事としてMFAへの援助と寄贈を続けました。

MFA理事会とは5ヵ年契約、年俸2600ドル。キュレーターとして特に安い給料ではありませんが、当時の為替レートからすれば2800円、日本での俸給の半額以下でしたが、収蔵品解説目録の作成、相次ぐ企画展の開催とその目録執筆、館内外における講演と執筆活動、と精力的に仕事をこなしていきます。(続く)

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (VII)

山口 静一

【23】 帰国したフェノロサの抱負

この時期のフェノロサの仏教に関わる記録として、1891(明治24)年5月1日付けの興味深いメモがハーバード大学ホートン・ライブラリーに残っています。アメリカにおける自分の抱負を書き記したもので、アメリカを理想的社会に変革するために

.... 日本人の美的感覚、それを育んだ日本の仏教理念、同胞意識と犠牲的精神、平和と寛容、協調と人類愛に象徴される菩薩の心

が必要だと結んであるのです。

1893(明治26)年のシカゴ万博を前に出版された長詩『東と西』も、アメリカを西洋と東洋との中間に位置する国と見定め、西洋の物質文明と東洋の精神文化とを融合することによって新しい理想的な文化をアメリカに芽生えさせようとする主旨のものでした。その最終章「東と西の将来の結合」には「西洋の男性的力と東洋の女性的な美とが美術と宗教を媒介として合一する」理想の境地が謳われています。東洋的価値観とりわけ日本仏教に対する深い愛着が詩の全編に滲み出ています。

【24】 アメリカでの仏教活動

しかしフェノロサがアメリカで実践的仏教活動を行った記録はありません。シカゴ万博に付随して万国宗教会議が開催され、日本からも多くの仏教者が参加しました。共に桜井敬徳の弟子で、フェノロサ・ビゲロウ改宗のきっかけを作った前美術行政官町田久成も出席したと伝えられていますが、両者が邂逅した記録は発見されていません。

当時アメリカでは東洋の宗教への関心が高まっていたようですが、それは日本仏教ではなく既述した神智学でした。この頃と推定されるフェノロサの神智学に対する痛烈な批判の文書がイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館所蔵書簡集にありました。ガードナー夫人(Isabella Stewart Gardner 1840-1924)に宛てた私信で、夫人の問い合わせに対し、小説家マリオン・クロフォード(Marion Crawford, 1854-1909)の仏教論を反駁したものです。クロフォードは仏教と神智学とを混同している、自分や友人のビゲロウが信奉する真の仏教とは大乘仏教を措いて他にない、そのことを是非理解して欲しい、とガードナー夫人を説得する熱意にあふれた



回峰修行するビゲロウ

書信でした。フェノロサの大乘仏教論は、MFAにおけるフェノロサ最後の企画展となった「大徳寺所蔵中国仏教絵画(五百羅漢図)展」の目録序文にも述べられています。

【25】 ビゲロウ・寛良・岡倉天心

実はフェノロサより深く仏教にのめりこんだのはビゲロウの方でした。掲載した写真(MFA所蔵)はビゲロウが叡山の回峰修行に挑んだときのもの(残念ながら日時不明)です。

帰国してからも故桜井敬徳に授けられた戒律の実践に励み、天台密教から真言密教へと研究を深めています。敬徳没後、法明院は弟子の直林寛良阿闍梨(1849-1922)が継ぎました。寛良は後に敬円と改名、第156代園城寺長史となった人です。両人の間において専ら書簡の和訳、英訳に尽力したのは天心岡倉覚三と弟の由三郎です。天心は単なる翻訳者にとどまらず自らも寛良に疑問を質し解説を求めたことが、法明院所蔵の書簡に示されています。書類は残っていませんが、かねてから師事していた室生寺の住職、丸山貫長阿闍梨(1843-1927)にも真言密教について意見を求めたことがあったと思います。

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(VII)続き

天心はビゲロウ在日中から、美術のみならず日本文化全般にわたる知識の提供者として、最も信頼を置いた日本人でした。のちに天心をボストン美術館に招聘したのも、理事ビゲロウの推挽によるもので

す。ビーコンストリートに邸宅をもつボストンの名家、裕福なビゲロウは法明院の大檀越でもありました。これは1899(明治32)年9月21日付ビゲロウに宛てた寛良の書簡(法明院蔵、訳文発送)ですが、文末に寄贈された蓄音機未着のこと等を記したあと、「月心大菩薩 貴下」と結ばれているほどです。「月心」は敬徳に授与された法号。かつてフェノロサが、「諦信居士殿」と呼ばれていたのと格段の違いです。

1901(明治34年)寛良が、園城寺長吏事務取扱に任命されたのを機にビゲロウに來山を要請。翌年それに応えたのがビゲロウ最後の訪日となりました。

現在法明院には件の蓄音機はじめ地球儀、望遠鏡などが飾られていますが、これらはビゲロウが寄贈したものです。

【26】MFA 助手メアリ・M・スコット夫人

フェノロサが法明院墓域に葬られるに至ったのは、再婚した夫人メアリの意向によるものでした。よってメアリについては多少詳しく触れておきます。

フェノロサのMFAでの任務は、寄託されていた日本美術品(ビゲロウ蒐集品やウエルドに譲渡したフェノロサ旧蔵品)解説目録の作成でした。しかし就任早々のモース・コレクション日本陶器買収の仕事、それに続く北斎展、浮世絵展、絵画・金属工芸展、大徳寺五百羅漢展の開催とその目録作成を独りでこなし、その合間に美術館主催の、また近隣各地から要請される講演会、また各種学会誌・研究誌への執筆に忙殺され、契約満期の前年になっても肝腎な館蔵品解説目録作成の方は進捗しません。1894年10月、遂に理事会は日本美術部に助手の採用を認めました。

フェノロサを選んだのは、当時ニューヨークで女性雑誌『ニューサイクル』の編集の仕事を手伝っていたメアリ・スコット夫人(Mary McNeil Scott, 1865-1954)です。日本での生活体験があり、文芸趣味豊かで日本文化にも理解をもつ南部出身の女性でした。館蔵品の各作品につき、フェノロサの口述をメアリが筆記する仕事が始まります。

【27】メアリの経歴

メアリはアラバマ州モービル出身、ニューオーリアンズではラフカディオ・ハーンを尊敬する美貌の文学少女で、男性たちの憧れの的でした。(ハーンとはのちに來日してから再会、ハーンの数少ない友人の一人になります。)多くのボーイフレンドの中から彼女はダンスの上手なルドルフ・チェスターという青年を選び、結婚して20歳のとき男子アレンを生みますが、この年ルドルフが病死、乳飲み子を抱えてメアリは実家に戻っていました。そのうち、かつてのボーイフレンドの一人だったレドヤード・スコット(Ledyard Scott, ?-1903)から何度も求婚の手紙が来るようになりました。レドヤードはメアリに振られ傷心を抱いて日本に向かい、鹿児島高等中学造士館(現鹿児島大学の前身)で英語とラテン語の教師をしていました。求婚の手紙は日本からのものでした。

チェスター未亡人メアリは遂に再婚を決意、5歳になったアレンを連れて日本に向かいました。横浜來着が1890(明治23)年7月26日ですので、12年の任務を終え同年7月6日日本を發ったフェノロサ一家とは太平洋上ですれ違ったこととなります。

しかしこの結婚はわずか1年余りで破綻します。メアリはアレンを連れて帰国し、1892(明治25)年2月実家で女兒アーウインを出産しました。後を追ってレドヤードもモービルに戻りますがメアリは同居を承諾せず、結婚生活はすでに修復不能の状態に陥っていました。

その後メアリはモービルやニューオーリアンズの新開・雑誌に詩や短編小説を投稿し、又滞日中の見聞等を発表して、次第に女流文学者として知られるようになります。夫から逃れてニューヨークに行き、『ニューサイクル』編集の仕事に携わっていたことは前述の通りです。MFAの助手に採用された時、先夫の子アレンは9歳、アーウインは2歳、メアリは29歳になっていました。

1895(明治28)年9月でフェノロサのMFAとの契約は満期となります。同年3月にメアリの身に事件が起きました。別居中の夫レドヤードが娘アーウインの親権を主張して起こした離婚裁判に敗訴したのです。娘を奪われて傷心のメアリを慰める立場になったフェノロサは、ここで重大な決意をします。すでにボストンでは二人のスキヤンダルが広まっていた。レドヤードの離婚請求理由のなかにフェノロサの名が言及されていたのでしょうか。

フェノロサ、ビゲロウと三井法明院(VII) (続き)

【28】リジーとメアリ

在日中の地位と高給は忘れがたいものでした。しかし社交好きだった夫人のリジーが黴臭い古画の収集に余り理解を示さなかったことは、在日中の言動によっても容易に想像されます。「私はセーラムのような退屈な所は大嫌い。ニューヨークのような社交的な都会で暮したい」と友人たちに語っていたと、クララ・ホイットニーは日記に記しています。クララはお雇い外人の娘で勝海舟の孫と結婚した女性で、明治初期東京に在留した外国人の動静を伝える日記を残しています。その中で彼女は度々フェノロサ夫人に触れています。

数少ないリジーの逸話に、夫が能楽師梅若実(1828-1909)について謡いの稽古をしていた時の出来事があります。稽古の最中、同席していた夫人がいきなりツカツカと謡っている梅若に近付き、その下腹を触ったというのです。一同呆気にとられていると、今度はフェノロサの喉を指して何とか言っている。後で「師匠の声は腹から出ているのに、あなたは喉で謡っている」と言ったことが分り大笑いになったという話です(梅若万三郎『亀堂閑話』より)。皇居や各省からの園遊会・舞踏会の夥しい数の招待状も残っています。ドレス代も大へんだったでしょう。クララ日記には「英国紳士方からは嫌われた」と書いてありますが、物怖じしない、陽気で活発な女性だったことが分ります。

夫の念願だった日本再訪に関しても余り積極的ではなかったと私は思っています。

一方メアリは、文学芸術に熱中するタイプの、どちらかという内気な性格だったことが、遺された日記などからも読みとれます。フェノロサの口述を筆記する傍ら、情熱的に語る日本美術論は彼女を感動させ、日本再訪の願望を我が事のように理解したことでありましょう。尊敬は次第に愛情に変わって行ったものと想像されます。

【29】離婚・再婚

MF A所蔵日本美術品開設目録は、契約満期の95年9月までに遂に完成せず、フェノロサは6ヶ月の休職願いを提出して活動の場をニューヨークに移します。プラット・インスチュートでの美術教育論講義と、『ザ・ロートス』と改題した雑誌『ニューサイクル』の編集と出版に携わるのが主な仕事でした。

MF Aの館長チャールズ・ローリングが理事会にフェノロサの契約更新を求めている最中に、同年10月2日突然、リジー夫人との離婚が成立しました。



新婚時代のフェノロサとリジー夫人

入手した裁判記録によれば、訴因はフェノロサがシカゴ出張中、商売女と関係して夫人の名誉を著しく傷つけたこと。判決は慰謝料、娘ブレンダ(12歳)の扶養料として「年額2600ドル(MF Aの年俸と同額)、プラス今後の収入が5600ドル以上あった場合その半額、フェノロサ名義の5万ドル信託基金の半額、蒐集版画の半分、コレクションを換金した時はその半額」を原告に支払う、という当時無収入となったフェノロサには過酷な内容のものでした。

しかしフェノロサは控訴もせずにこれを受諾したのです。金銭上の問題は、日本に行けば何とかするという楽観的な見通しがあったのでしょう。妻と娘を裏切った背徳の男という汚名と引き替えに、フェノロサは同年12月ニューヨークでメアリと結婚します。

もともとこの離婚劇は、メアリと結婚して日本再訪を実現するために仕組まれた計画のように思われる節があります。まず、潔癖なフェノロサの性格からして、シカゴでの行跡は考えられぬこと。また、莫大な金銭的負担と体面上の侮辱を甘受したこともさることながら、被告の側から積極的に資料を提供したふしもあり、判決を早めるための工作だったのではないかと疑われるのです。

【30】ボストンとの訣別

いずれにせよスキャンダルの発生源となったMF Aが不快感を示したのは当然でした。館長の要請した契約更新に理事会は同年10月「館蔵浮世絵目録作成を条件に2年間延長、但し勤務時間半減、年俸1500ドルに減俸」と決定して不行跡に対する処分としました。

フェノロサ、ビゲロウと三井法明院(VII) (続き)

しかしフェノロサは出勤せず、翌 96 年 1 月ニューヨークの浮世絵商 W. H. ケチャム主催の浮世絵展「浮世絵の巨匠たち」に協力し同名 “The Masters of Ukiyo” と題する詳細な解説目録を執筆刊行します。

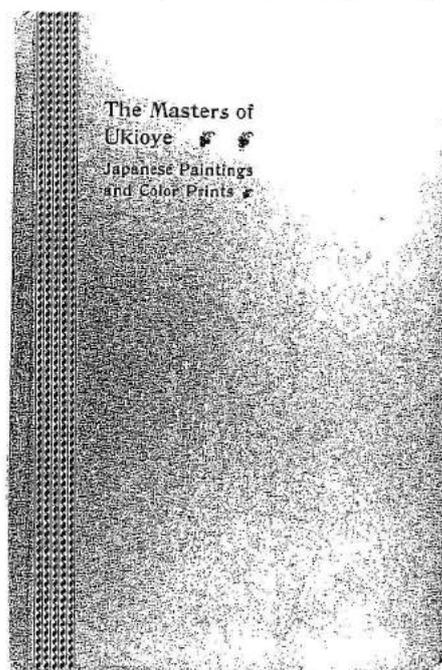
日本美術目録は未完成、せめて館蔵浮世絵目録だけでも発表したい MFA の期待は全く裏切られたこととなります。しかも同書には、かつて MFA が発行し著作権を持つ北斎展目録『北斎とその流派』(“Hokusai and His School” 1893 年フェノロサ執筆) から無断引用した部分が目立っていました。MFA はフェノロサに警告文を送付しますが、これに対しフェノロサからは館長宛に「日本美術部所蔵絵画を私に無断で撮影することを禁じられたし」の電報が打たれ MFA 理事会は激怒し同年 4 月 1 日付けで無期休職を通告。これに答えてフェノロサは 4 月 15 日付けで辞表を送付、理事会に届いたのはメアリ同伴ヨーロッパ経由で日本に向かう船上でした。

事務引継ぎも行われず、ただならぬ辞任劇、作成途中の日本美術品解説目録も行方不明。MFA からすればフェノロサ追放と言った方が当たっているかもしれませんが。MFA 理事会の最も有力理事は他ならぬビゲロウでした。記録は残っていませんが、フェノロサの行跡に最も厳しかったのは謹直なビゲロウだったと思います。

以後長期間にわたって MFA ではフェノロサの名は禁句となりました。「フェノロサ・コレクション」も「ウエルド・コレクション」と改称されたほどです。1904(明治 37)年以降、MFA 中国日本美術部の実質上キュレーターとなった岡倉天心も、恩師の不評には吃驚したことでしょう。フェノロサも生涯ボストンには近付きません。失意と苦難に彩られた後半生の始まりでした。

【31】日本再訪

離婚裁判の判決により、再婚したフェノロサには差し迫って前妻リジーに年額 2600 ドルを月割りで送金する義務が生じていました。6 年前日本から帰国するまでは大臣並の高給(年俸 6000 ドル)を食んでいたのです。日本に行けば何とかなんと楽観したのは無理ないことでしたが、その思惑はみごとに外れました。友人や教え子たちの懸命の努力にも拘わらず、適当な就職口は全く見つかりません。御雇い外国人を必要とする時代は既に過去のものとなっていました。その上為替レートはこの 6 年間に 100 円当り 87 ドルから 52 ドルに下落していました。前妻に送金する分だけでも毎月 400 円以上稼



MFA 訣別の直接原因となったニューヨーク浮世絵展「浮世絵の巨匠たち」解説目録

がなければなりません。

まず手を染めたのは友人の浮世絵商小林文七と組んで在米ケチャムを相手とする浮世絵売買。これが失敗に終わり、文七主催の浮世絵展目録の執筆、また『浮世絵史概説』の出版。2 年後ようやく教え子嘉納治五郎の斡旋で高等師範学校と付属中学に英語英文学教師の定職を得ますが、この月給が 200 円。講演・執筆の依頼はすべて引き受け、何とか糊口を凌ぐのがやつの有様です。加えて頼みの綱だった岡倉天心は 1898 (明治 31) 年、私行を糾弾されて東京美術学校長解職。フェノロサにとっては八方塞がり、日本再訪は失敗に終わったと言えましょう。

次の一手は、帰国して旅芸人ならぬ巡廻講師となり、アメリカ各地で日本を紹介する仕事でした。そのためには更に広く、また深く日本文化を知らねばなりません。再訪 3 年間の大半はそのための知識の拡大に使われています。古事記・万葉集の勉強、能楽の稽古、謡曲の翻訳、漢字・漢詩の研究、真言密教への接近などがその一環でした。通訳や助言者としてフェノロサの研究に協力したのは、教え子の有賀長雄と付属中学の若き同僚平田喜一(後の英文学者平田禿木)でした。

滞在中メア리를誘って三井寺法明院を訪れ、直林寛良を拝して受戒させたことがありました。離婚再婚で既に戒律を犯した夫婦でしたが、ビゲロウと異なりフェノロサ夫婦の場合、仏教は日本文化の源泉、信仰と言うよりは知識として受けとめていたように思われます。

(続く)

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(VIII)

山口 静一

【32】メアリの喜びと悲しみ

メアリは毎日丹念に日記を付けていました。また何通かの手紙が残っていますので、夫妻の日本での生活はかなり詳しく跡付けできます。

東京でメアリが最も感激したのは、ラフカイルド・ハーンとの出会いでした。文学少女時代から尊敬していたハーンとの交渉は、日記や往復書簡に感動的に綴られています。又、親しく付き合った同国人女性に、のちに同志社女学校勤務60年のミス・デントン、(Mary Denton, 1857-1947)、また彼女との縁で知り合った宣教師バートレットの夫人ファニー(Mrs. Fanny Bartlet, 1873-?)がいます。ファニーは新島襄の依頼で同志社の教員となったゴードン牧師(Lafayette Gordon)の娘です。

しかしメアリには日記にも書けなかった悲しみがありました。東京セントポール男子校(現立教大学)・聖マーガレット女学校(現立教女学院)の各校長だったガーディナー夫妻(Mr. & Mrs. James McDonald Gardiner)は、以前からフェノロサと親しかった宣教師夫妻でした。ある日麹町の自宅にガーディナー夫人の招待会があり、東京在留英米人の夫人たちが集まったことがありました。そこへフェノロサ夫人メアリも招かれましたが、来入したメアリを見るなり、ひとりの英国外交官夫人は「ツンと顔をそむけ、穢らわしいものから避けるようにスカートの端をつまんで退場してしまいました。他の夫人たちも其々言訳をつくらって全員退席、部屋にはフェノロサ夫人だけが残った。」この村八分のような仕打ちは、当時12歳だったガーディナーの長女ハスノハナにとって、生涯忘れられない大事件でした。

以後牧師夫妻は、同国人の誰からも招かれることのないフェノロサ夫妻をしばしば招待して歓談したと、ハスノハナは回想していますが、父親の異なる二人の子供を持ち、しかも三度目の結婚相手が直属の上司だったというメアリは、在留英米人の女性たちにとってまさに聳動の的でした。メアリを快く受け入れたのは主として教会関係者だけだったようです。

【33】巡回講師の生活



メアリ夫人(法明院蔵)

夫妻が帰国の途に就いたのは1900(明治33)年8月。翌年夏4ヶ月ほど訪日して研究成果をまとめ、以後晩年の7年間、毎年米国東部から中西部の諸都市を歴訪し、自薦他薦の講演会・夏期学校講師として生計を立てます。おりから高まっていた日本への関心に乗って、この計画は間違っていないでした。

とくにデトロイトの蒐集家フリーア(Charles Lang Freer, 1856-1919)の知己を得てから、生活は目立って好転したようです。彼はフェノロサ所蔵品を高価に買い上げ、また自らの蒐集にフェノロサを選定顧問としたからでした。現在ワシントンのフリーア・ギャラリーと、隣接するサックラー美術館にはフェノロサの旧蔵品に加え、フェノロサの鑑定で購入した淋派や北斎肉筆の優品が所蔵され、MFAと肩を並べる東洋美術の宝庫になっています。

1902(明治35)年にはメアリの実家のあったモービル市の郊外にマイホームを建てたほどでした。1903(明治36)年にはレーズベルト大統領の招待を受けてホワイトハウスで講演し、日本の国際的立場を擁護しています。この年の秋、コロンビア大学で中国語・中国文学の講演を連続聴講した記録が残っています。旺盛な知識欲は衰えていません。

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(VII)続き

日露戦争勃発後は講演依頼が激増し、特にニューヨークでは1906(明治39)年11月から婦人講座毎木曜日20回連続講演、翌年2月山中商会主催毎週火曜日12回連続講演が開催されています。後者の演題は“Epochs of Chinese and Japanese Art”。この頃のフェノロサはライフワーク「東洋美術史」の構想に熱中していましたが、この講演はその試論だったのでしょう。のちにメアリが編纂した遺著『東亜美術史綱』の骨格を形成するものでした。

蛇足ですが、フェノロサにとってもう一つの楽しみはメアリの小説執筆に助言することでした。1906(明治39)年出版の3冊目の小説“Dragon Painter”は日本の画家を主人公にしたもので、のちに早川雪洲主演で映画化されるほどの人気を博しています。

【34】フェノロサ、ロンドンで急死

1908(明治41)年5月、ニューヨーク山中商会画廊開催『浮世絵肉筆版画展』目録の執筆を終えたフェノロサは「ヨーロッパ美術研修旅行クラス」の解説者としてヨーロッパ各地の美術館を歴訪します。妻メアリと、4年前にレドヤードの死去以来母の許に戻っていたアーウィン(16才)が同行しました。

無事日程を終え、フェノロサは8月下旬ライン下りを楽しんでケルンへ、9月初め大英博物館で環太平洋文化圏に関する資料を調査するため一家でロンドンのホテルに宿泊していましたが9月21日、突然、急激な心臓発作に襲われて急逝しました。メアリは後に手記に記しています。

・・・明日はリヴァプールからアメリカ行きの汽船に乗ろうとしていた時だったのです。当時イギリスに親しい友人はいませんでした。この突然の不幸に見舞われた時、私はどうしてよいやら何を考えてよいやら分りませんでした。十何歳かになった娘と一緒に居ませんでしたら、どうして生きて行かれたことでありましょう。夫は英国国教会の葬儀によりハイゲート墓地に埋葬されました。数日後、娘と私は帰国しました。

病床でフェノロサは、携行した『オクスフォード詩集』の中から好きなロゼッティの詩“Blessed Damozel”をアーウィンに読んでもらっている時、二度目の発作に襲われ、「メアリ」と一言叫んだのが最後だったとも、記しています。享年55歳でした。

この手記は、続けて遺骨を三井寺に移葬した事情、夫の仏教研究が決してキリスト教に背を向けるものではなかったという弁解、遺著出版に至る経緯、のちにハイゲート墓地に建てた記念碑のことなどを綿々と書き綴ったもので、1940(昭和15)年75歳になったメアリが雑誌『ライフ』編集部に書き送った書信です。折から険悪な様相を呈し始めた日米間の政治的情勢に伴う米国民の反日感情から、亡き夫を少しでも誤解の圏外に引き出したいという気持ちにあふれています。結局『ライフ』はこの手紙を取り上げなかったようで、彼女はその写しに、フェノロサが三井寺に葬られることを望んだ理由を明らかにする手紙を添えて、今度はボストン美術館長宛に送りました。この2通が、現在MFAアーカイブスに残っています。

【35】フェノロサの訃報

埋葬後メアリは、取り敢えず夫の死をニューヨークの新聞社と、マサチューセッツ州ケンブリッジに住む前夫人リジーに電報で伝えます。リジーからの連絡で故郷セーラムの夕刊紙に訃報が載ったのはその翌日、フェノロサの死から5日経った9月26日でした。

翌27日、東京朝日新聞ニューヨーク特派員から電報「フェノロサ博士逝去、わが国に縁深きフェノロサ博士は此の程倫敦の客舎にて死去せし由留守宅に通知ありたり」が同紙に掲載され、その後故人の友人知己による追悼談が相次いで日本のジャーナリズムを賑わすことになりました。因みにフェノロサは学位としての博士号を取得したことはありません。「学識豊かな人物」としての敬称です。

各種新聞に掲載された十指に余る追悼文は、それぞれ興味深いフェノロサ生前の逸話を伝えています。金子堅太郎談話に始まる雑誌『太陽』(同年11月)の特集記事「日本美術界の恩人故フェノロサ君」がもっともまとまっているようです。

(次号に続く)

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (IX)

山口 静一

【36】ボストンでの反響

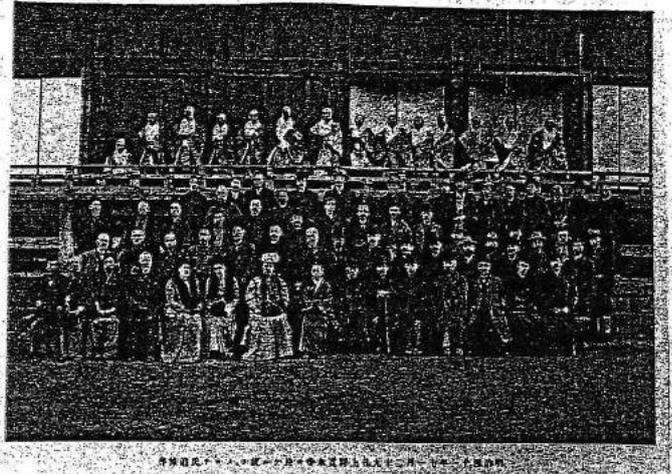
漸く著名になりかけたこのジャパノロジストの急逝をロンドンで報じた新聞は一紙もありません。各紙とも連日サラサーテの訃報に埋められています。美術批評家ローレンス・ビニヨン (Laurence Binyon, 1869-1943) が『サタデー・レビュー』に載せた小論の前半部をフェノロサ追悼に当てたのは翌月になってからでした。アメリカでは1908 (明治41) 年11月2日付けでハーバード大学クラスメートによる公式追悼文が公表されています。

注目すべきは後者です。筆者は同窓の詩人・翻訳家 N. H. ドール (Nathan Haskell Dole, 1852-1935)。二つ折り4ページの短い文章でフェノロサの生涯を要領よくまとめていますが、「彼には妻と1883年7月25日生まれの娘ブレンダが後に残っている」と記し、メアリとの再婚を認めていないのです。締め括りも「我々は友人の過ちに目をつぶるわけには行かぬが、人生の最も貴重な財産に恵まれた友人として彼を記憶に留めることに吝かではない」と結ばれています。ボストンの友人たちが、フェノロサの業績に関心を示しながら彼を敬遠した理由がよく分る追悼文でした。

実際リジーは離婚後も、自らフェノロサ夫人と名乗り、他からもそう呼ばれていました。以下は離婚裁判でも彼女の味方であったビゲロウの12月6日付けリジー宛哀悼文です (ハーバード大学ホートン・ライブラリー蔵)。

・・・彼はある意味では偉大な人物でした。能力と実行力を具えていました。多くの点で例外的な人物でした。しかし、あらゆる点で例外的たり得ると考えたところに彼の過ちがあったのです。人間はあらゆる時にあらゆる人よりも賢明であるわけにはまいりません。最も強烈な個性の中にさえ、きわめて凡庸な大いなる過ちがあるものです。これを無視することは即ち災いを招くことになります。

彼の霊の安らかに眠らんことを。もし彼にして正しく身を処することができたならば、彼は真に偉大なる人物となっていたであらうでしょう。しかしながら、大いに世のために尽くしたことは事実であります。・・・



【37】フェノロサ追悼法要

法要は1908(明治41)年11月29日於上野寛永寺。故人の教え子で、終始恩師の日本研究を扶けた有賀長雄が祭主となり、輪王寺門跡救護栄海上人を導師として僧侶13人が読経、帝国大学総長浜尾新、前宮内大臣土方久元が弔辞を捧げ、参列した友人知己60余名が焼香したのち記念写真撮影があって、追悼記念会は上野精養軒で開催されます。

文学部第1期生としてフェノロサに教わった井上哲次郎 (帝国大学教授) の挨拶、ハーバード大学で同期、フェノロサに日本美術の手ほどきをしたと自認する金子堅太郎の講演があってから遺著の出版、故人半身像を美術学校内に建設すること、メアリ、リジー両未亡人に追悼文と記念写真を贈ることが決議され、その後食卓を囲んで各氏の追悼談が始まりました。

席上メアリから有賀長雄に宛てた10月23日付けの手紙 (彼の弔文に対する返書) の邦訳が配付されました。その中でメアリは、亡夫の遺骸をモービルの自宅の近くに移葬したいと述べ、「かつて彼は、わたしと一緒に三井寺に葬られたいもの、と言ったことがあります、それは到底実行し難きこと。臨終の時もそのようなこと話しませんでした」と書いています。

この時点でメアリは遺骨の日本送還を考えていなかったことが分ります。しかし12年前に三井寺を訪れた際、琵琶湖を見下ろす法明院の庭に立ったフェノロサが「死んだら一緒にここで眠りたい」とメアリに語ったのは事実だったのでしょう。その景観のすばらしさをメアリは生涯忘れませんでした。

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(IX)続き

【38】遺骨の三井寺移葬

故郷モービルに帰ったメアリが最も頼りにしたのはデトロイトのチャールズ・フリーアでした。彼は遺産処理その他故人の残したさまざまな問題について助言を求めた未亡人に対し、哀悼の意とともに懇切を極めた返書を送っています。懸念された前夫人リジーと娘ブレンダからの遺産相続に関する異議申し立ての提訴についても、親身になって相談に応じ、こまごまと対処の仕方を教えています。(フリーア・ギャラリー所蔵書簡)。遺骨の環送も、フリーアの示唆によるものでしょう。

メアリは翌1909(明治42)年4月、遺骨をロンドンから日本に改葬したい、就いてはその斡旋を願いたい旨の手紙をニューヨークの山中商会支店に送りました。山中商会はフェノロサに講演を依頼し、前年には主催する浮世絵展に解説目録を執筆させた縁故もありましたが、フェノロサは在日中からの上得意であった上、最近フリーアの代理人として輸入作品の鑑定購入に当たっていました。

この手紙はニューヨークの水野幸吉総領事を経て三井物産社長益田孝の許に届けられます。鈍翁と称した益田孝は当時財界きっての古美術蒐集家として知られ、故人とも面識のあった人でした。彼は手紙を追悼会の代表者有賀長雄に渡します。

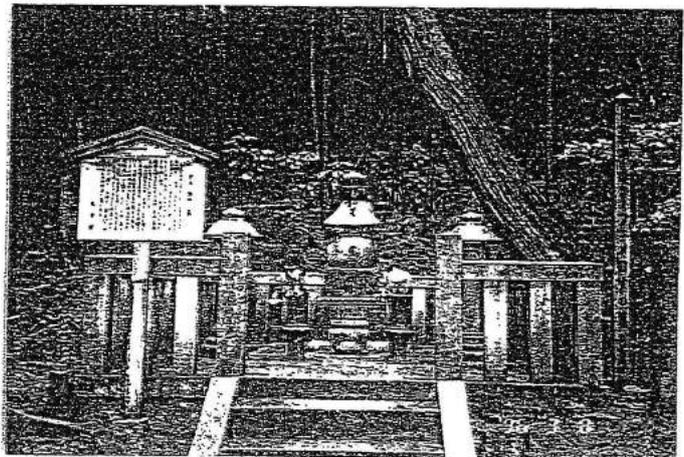
その結果メアリから直接、三井寺への改葬を望む故人の遺志を伝える書簡が有賀に届きました。有賀の奔走が始まります。彼はたまたま帰朝していた山中商会ロンドン支店の林愛作と面談してハイゲート墓地の様子を聴取し、改めて火葬に付するための手続きや経費の調査を山中商会に請う一方、自ら三井寺に出向いて直林敬円長吏と交渉、法明院墓域への埋葬許可を得ます。やがてハイゲートの火葬費用は3,40ポンド、法明院の墓は300円程度で出来ることが分りました。

同年7月、有賀は東京帝国大学山上御殿で総長浜尾新、東京美術学校長正木直彦、同校商議員河瀬秀治ら生前フェノロサと親しかった有力な先輩諸氏と相談。結果美術学校から200円、大学から400円の贈呈が決定します。

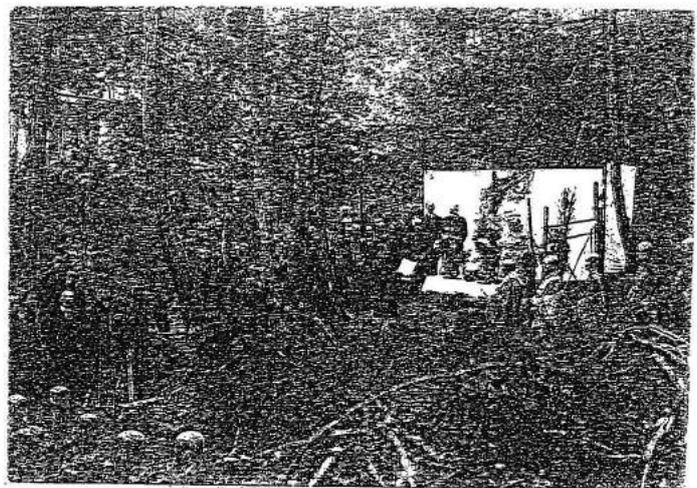
一方、同年8月中にロンドンから送られてきた遺骨は、あたかも故人の一周忌に当たる同年9月21日シベリア鉄道を経由して敦賀に到着。即日法明院に埋葬されました。(以上、フェノロサー一周忌、十三回忌の有賀長雄回想録による)。



三井寺法明院



法明院 フェノロサの墓



法明院フェノロサー一周忌法要

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(IX)続き

【39】墓碑の完成

同年10月、白川石の五輪塔墓碑完成。碑型は伊藤忠太、正木直彦が相談して相国寺の定家卿の墓に倣い五輪塔に決定。梵字は敬円阿闍梨、撰文は教え子の長老井上哲次郎。日吉神社宮司伊藤紀の浄書した碑文が墓石基壇四面に刻されています。墓前の石製香炉、石製花瓶、石製灯籠、各一對はフリーアの奉納によるものでした。碑文は現在苔むして読みづらくなっていますが、別記の通りです。

【40】法明院での一周忌法要

同年11月14・15の両日、フェノロサ一周忌の法要が法明院で盛大に挙行されました。墓前には勳三等瑞宝章、勳四等旭日章を胸に飾ったフェノロサの写真と供花に花輪。茶菓数種が供えられ大僧正直林敬円長吏および一山衆僧の読経、宮内大臣岩倉具定の祭文代読、続いて有賀長雄のフェノロサ来歴朗読、発起人・幹事らの祭文が読み上げられました。参列70余人には、神戸の米国総領事、同志社のミス・デントンらが在留外国人に混じってヨーロッパからの帰途法会参加のために立ち寄ったチャールズ・フリーアの姿もありました。

法明院の記録には敬円阿闍梨読経のあと、「メアリ未亡人献香」とあるのですが、有賀もメアリ来日のことに触れていません。おそらく代理の焼香だったと思います。当時メアリはモービルの自宅で遺稿の整理に忙殺されていました。

一方法明院の茶室では煎茶が立てられました。ここには神戸の川崎正蔵愛蔵の古画と並んで山中商会蔵フェノロサ筆「月下流水図油絵」の額が飾られたと『追悼会会記』は記録していますが未見です。

また当時三井寺塔中の一つだった円満院では、山中商会の肝入りでフェノロサ追悼古画展が催され、三井寺什宝を始め主として関西コレクター所蔵の古画・円山四条派・浮世絵など100余点が陳列され、また京都の吉田直次郎(著述家、出版書肆至誠堂主人)別邸では追悼茶席が用意されるという盛大な法要でした。これらの費用もすべて山中商会が負担したと、有賀長雄は伝えています。

【41】三井寺に帰りたい釣鐘の物語

後年メアリはMFAの館長宛てに亡夫の復権を求める書簡(Aug. 2, 1940)を送っていますが、その中に遺骨の三井寺移葬に関する次のような興味深い

物語が記されていました。

・・・ある時、それは中世の、仏教が日本で最も栄えていた頃のことです。全国の寺院の釣鐘で一番名の知られていたのが三井寺の鐘でした。ところが何マイルも遠くのある寺では大層それを妬んで、頭の弱い大男弁慶を雇い、夜陰に紛れてその鐘を盗ませたのです。鐘を自分の寺に運ばせ、かねて用意してあった鐘楼に吊り下げました。よこしまな坊主や行者は喜びの酒宴を開き、いざ鐘を打つてみたのですが、三井寺の誇りであったあの深く殷々と響き渡る音色は聞こえて参りません。その代わりに鐘は震えだし、しくしく咽び始め、やがて大声で「三井寺に帰りたい」「三井寺に帰りたい」と泣き出したのです。何度やっても同じ有様ですので、遂に嫉妬深い僧侶たちも諦め、再び弁慶を雇って鐘を三井寺にかえたのです。

アーネスト・フェノロサは友人ビゲロウ博士と共にかけて三井寺の阿闍梨すなわちアーチビショップのもとで仏教を研究する許しを得たことがあり、三井寺の場所と環境に深く惹きつけられておりました。そして私や他の人たちに、よくこう申していたのです。死が自分を襲った時は、たといそれがどこであろうと、自分の遺骨はやはり三井寺に葬ってもらいたいものだ。はっきりと申しました。もし他の場所に葬られたら、きっと盗まれた釣鐘のように「三井寺に帰りたい」と泣き叫ぶであろうと。ロンドンの、あの痛ましい最後の日にも、心臓の発作がおさまるたびにそれを申しておりました・・・・・・・・・・・・・・・・

私がアラバマの故郷に帰り、やっと筆を持てるようになり時、何人かの日本の友人たちに夫の「三井寺に帰りたい」という希望を書いてやったのです・・・・・・・・・・・・・・・・

フェノロサの遺志をかなり大袈裟に脚色した文です。メアリが小説家であったことが改めて思われます。また、日米関係が悪化した頃の書簡で、亡夫が真に日本仏教に改宗したわけでないことを訴えた文章でもありました。同じ趣旨の文を週刊誌『ライフ』に投稿したと述べていますが、『ライフ』は記事にしていません。

(次号に続く)

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館館長)

フェノロサ先生墓碑碑文

正面(北面)

飛諾洛薩先生
諱越爾涅私篤
仏蘭西斯格。一
千八百五十三年
二月十八日
生于米國沙列
謨市。其先出于
西班牙。母米國人。
先生學于哈靈
士大學專修哲
學以英才顯。明

左面(東面)

治十一年為我
東京大學所聘
來講哲學。論理
明晰鑿鑿中竅。
居數年考考究
日本美術。大有
所得。明治二十
三年期滿歸國。
朝廷乃叙勳三
等後再三來遊
然不久留而去

背面(南面)

自是于講演于
著述唱導日本
美術之精妙而
不己將著書以
有所大主張而
暴歿于倫敦客
舍時一千九百
八年九月二十
一日也先生會
學仏教于桜井
敬徳阿闍梨深

右面(西面)

信之遂受戒号
曰諦信故知友
門人相謀改葬
于園城寺法明
院蓋因于其遺
志也。明治四
十二年十一月
一日文學博士
井上哲次郎撰
日吉神社宮司
伊藤紀筆

正面(北面)

フェノロサ先生
諱(いみな)はエルネスト
フランシスコ。一
千八百五十三年
二月十八日
米國セーラム
市に生る。その先
はスペインに出づ。母は米國人
先生ハーバード大學に
學び専ら哲學を修し
英才を以て顯わる。

左面(東面)

明治十一年わが東京
大學の聘する所と為り、
來たりて哲學を講ず。論理
明晰鑿鑿として毅(クワン)にあたる。
居ること數年、旁ら日本美術
を考究し大いに得る所
あり。明治二十
三年期滿ちて歸國す。
朝廷乃ち勳三等に叙す。
後再三來遊す。
然れども久しく留まらずして去る。

背面(南面)

これより講演に、著述に、
日本美術の精妙を
唱導してやまず。將
に書を著し以つて
大いに主張する所あらんとす。
而してにわかにロンドンの客舎に歿す。
時に一千九百八年
九月二十一日也。
先生會つて仏教を
桜井敬徳阿闍梨に
學び、深くこれを信じ、遂に

右面(西面)

受戒し号して諦信と曰う。
故に知友門人相謀りて
園城寺法明院に改葬
す。蓋しその遺志
によるなり。
明治四十二年十一月
一日文學博士
井上哲次郎撰
日吉神社宮司
伊藤紀筆
*「あまやかにかまとをつく」

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (X)

山口 静一

【42】遺骨の軍艦移送説

フェノロサの復権を願う余り、メアリには他にも幾つかの誇張した表現があります。一つは帰国後のフェノロサがコロンビア大学教授として比較文学を講じた、とフェノロサ遺著の序文に記したことで、これは後に十三回忌に東京美術学校に建てられた碑文にも明記されてしまいましたが、その事実はありません。この遺骨移送もその類いで、日本政府が遺体を引き取るために軍艦を派遣した話です。これはメアリからフェノロサ遺稿を譲り受けた詩人エズラ・パウンド(Ezra Pound, 1885-1972)が1916年フェノロサと共著の形で出版した『能楽』(‘Noh’ or Accomplishment)の序文に述べられており、メアリからの聞き書きでした。

この箇所を、著名な英文学者矢野峰人博士が洋々社刊『日米文化交渉史』の一冊『学芸風俗篇』に紹介したのは昭和30年です。4年後博士は宝塚在住の岡田友次という人から「フェノロサの遺骨を迎えるために日本政府が軍艦を派遣したとあるが、それは如何なる文献に拠ったか」という質問状を受け取りました。出典の根拠を回答したところ、岡田氏は折り返し「それは事実と反する。遺骨は自分の友人で山中商会ロンドン支店の社員であった者が携え、シベリア経由で敦賀に持ち帰ったものである」と書き送ってきました。実は岡田氏は当時山中商会社員でロンドンに在り、フェノロサの遺骨に関するいっさいの手続きを担当した本人でした。

2年後、この話に興味をもった同志社大学教授衣笠梅二郎はアメリカのメアリ未亡人に書を寄せ事の真偽を質したのですが、メアリはすでに1954年に死去しており、今はウオットリー夫人(Mrs. Whatley)となっている娘のアーウィンが母に代わって「遺骨を山中商会の社員がシベリア経由で日本に持ち帰ったというのは嘘である」と回答してきたのです。衣笠教授はこのことを研究社のリーフレット『英語と英文学』に発表します。

これを読んだ岡田氏は、今度は直接京都に衣笠教授を訪ね、在来の通説の誤りであることを告げると同時にウオットリー夫人に自ら手紙を書いて事の次第を知らせました。岡田氏によれば、実際に遺骨を携えて日本に持ち帰ったのは当時ロンドンで骨董商

を営んでいた加藤八十太郎だったということです。

岡田氏の詳細な説明にたいし、ウオットリー夫人は長年にわたる誤解が是正されたことを率直に感謝してきました。岡田氏は更にロンドンの出版社気付けでパウンドにも手紙を送ります。パウンドは戦時中スイスから反米放送を行ったことで戦犯に指名される恐れがあり、友人たちによって精神病院に匿われているとの情報もあって居所不明でしたが、予想に反しイタリアのティロロから丁重な返事が届きました。パウンドも『能楽』再版の際は当該箇所を是正する、と記していますが、これは実現していません。

以上は矢野峰人が事の顛末を雑誌『日本古書通信』(昭和39年8月号)に寄稿した一文の概略です。筆者はそれでも軍艦説にこだわり、「ウラジオあたりで停泊していた砲艦か駆逐艦が好意的に運んでくれたのではあるまいか」と結んでいます。

【43】ハイゲート墓地の記念碑

亡夫一周忌追悼会に出席しなかったメアリは、自宅で東洋美術に関するフェノロサ草稿の整理に没頭していました。亡夫のニューヨークでの連続講演 Epochs of Chinese and Japanese Art (1907) レジメを中核に雑多な旧稿や講演草稿を選択編集し、「遺著」として出版するのが目的でした。

漸く形を整えた原稿を携え、さらに訂正解読のため娘アーウインを連れて来日したのは1910年の春でした。原稿の修正は有賀長雄と、最も親しかった画家狩野友信が当たりました。

当然法明院に墓参したはずですが、それを記録した文書は未見です。

約2ヵ月の滞在の後母娘はロンドンに向かいます。能楽関係の草稿をパウンドに譲渡する話などもありましたが、ロンドンでメアリが最初にやった仕事は、ハイゲートの、一時埋葬してあった場所に記念碑を建てることでした。

碑文は下記の通りです。

HERE FOR A BRIEF TIME LAY
THE BODY OF
ERNEST FRANCISCO FENOLLOSA
LOVER AND INTERPRETER OF ART.

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(X)続き

POET, PHILOSOPHER AND SEER,
 BORN AT SALEM, MASS. FEBRUARY 18TH 1853
 DIED IN LONDON SEPTEMBER 21ST 1908.
 HE RESTS NOW FOREVER, THROUGH THE LOVE
 AND LOYALTY OF JAPANESE FRIENDS,
 IN THE SPOT WHERE HE WISHED TO LIE,
 THE TEMPLE YARD AT MIIDERA,
 ON THE SHORES OF LAKE BIWA, JAPAN,
 THE STONE IS ERECTED BY HIS WIFE

MARY McNEIL FENOLLOSA.

1975年私が初めてハイゲート墓地を訪れた時、この記念碑は墓地のほぼ中央、ちょうどカール・マルクスの墓の裏側に苔むして建っていました。後にマルクスの墓が立派に改装されて墓地の正面に移動した際この記念碑も移され、現在は奥の無縁地区にひっそり建っています。

【44】ビゲロウ、ハーバード大学で仏教を講義

ハーバード大学では、卒業生ジョージ・インガソルの遺志により5000ドルの基金で「靈魂の不滅」をテーマに毎年「インガソル講座」が開講され、講義録をホートン・ミフリン社から刊行していました。1908年、ビゲロウはこの講座に依頼されて仏教論を講義、『仏教と靈魂の不滅』(Buddhism and Immortality)が出版されています。かつては桜井敬徳から直接、のちに直林敬円との文通によって研鑽を積んでいたビゲロウは、すでにアメリカにおける日本仏教研究の第一人者と目されていたのです。

わずか76ページに満たぬ小型本ですが、北方仏教の説明から始め靈魂不滅、永遠の生を「涅槃」(ニルヴァーナ)に求める仏教の理念を、デカルト、エマソンなど西洋思想を例にひきながら、ビゲロウの仏教理解を聴衆に伝えようと試みた講義でした。終わりの方で彼は

「分けのぼる麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな」

という日本の古歌を紹介しています。一般には、宗派は異なっても目指すところは同じ、と解釈される歌と思いますが、ビゲロウは別の捉え方をしています。麓の道すなわち登攀する山を彼は「物質世界」と考え、頂上は物質世界の生んだ「意識」によって人間が個的存在を維持して立ち得る最高地点、「意識」の最高形態「多くの求道者が安んじて留まる崇高な境地」と解釈しました。「眼下の俗界、天上の星空を求道者が共に把握できる」地点、其処までは他

の宗教・哲学でも到達できる究極の境地であると。しかし、とビゲロウは続けます。「仏教はさらにその先を見る。俗界の更の下、星空の更の上に、両者を包括する天空が存在する」、そこには「物質世界では得ることのできない平安」「物質で学んだ理解を越える平安」がある。「無限の意志と無限の意識が一体化した平安」この静寂の境地こそ《ニルヴァーナ》である。これが講義の結論でした。果たして一般聴衆は理解することができたでしょうか。

なお1908年は10月から12月まで、インガソル・レクチャーに引き続いて8回にわたる仏教講義を開いたことが“The Harvard Crimson”紙に記録されています。(本会会員三好彰氏よりの情報)

【45】ビゲロウ、ウインズロウ、アネサキ

ビゲロウは大学だけではなくボストンの私邸やガードナー夫人の邸宅でもしばしば仏教講話会を催したようです。

1922年はビゲロウ72歳の年ですが、1月から2月にかけて7回にわたる仏教論議の記録が前述ホートン・ライブラリーに保存されています。タイトルは「ビゲロウ仏教ノート」とありますが、仏教に関する二人の質問とビゲロウの回答を、同席したビゲロウの秘書が記録したもので、寄贈者はMrs. Frederick Winslow (後述)です。天台・真言の密教のみならず仏教全般についてのビゲロウの理解を示す貴重な資料です。(興味あるエピソード1件。悲母観音像と聖母信仰との関連で談たまたま狩野芳崖に及び、「芳崖は売れたが橋本雅邦は無名だった。そこでわしは雅邦に毎月給金を払って、作品を購入した」と回想している部分があります。フェノロサも20円の月給で芳崖を雇い制作させていました。)

質問者はDr. W. Mrs. W.とのみ記されていますが、Dr. Frederick Bradlee Winslow (1873-1937)と夫人Mary Williams Winslow (1875-1970)と思われる。ドクター・ウインズロウはボストンの著名な内科医でビゲロウの後輩。ビゲロウ邸(56 Beacon Street)のすぐ近く(256 Clarendon Street)に住んでいました。10年前大病を患ったビゲロウの主治医だったのかもしれませんが。ウインズロウ夫人はスイス、イギリス、フランスに留学して古典ギリシャ研究を専攻した教養豊かな女性で、ハーバード大学哲学教授サンタヤーナ(George Santayana, 1863-1952)の近しい友人でした。(この項、三好彰氏のご教示による)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(X)続き

ビゲロウの回答中、しばしばアネサキの見解が引用されています。東京帝国大学教授(宗教学)姉崎正治(1873-1949)がハーバード大学日本文明講座に客員教授として招聘されたのは1913・14(大正2、3年)の2年間です。姉崎は「日本宗教史」を本講義として2年間、他に「仏教各派の思想」「詩と宗教」「仏教美術と仏教理念」などを講義しています。後者はMFAでの出張講義でした。ビゲロウはこれらの講義を介して姉崎と接触し質疑を交わしたに違いありません。

【46】ビゲロウの死と法明院への分骨

1926年(大正15年)10月6日、MFA理事ビゲロウは76歳で死去しました。遺言により寄託中の美術品はすべてMFAに寄贈されました。フェノロサ旧蔵品をはるかに凌ぐ数万点のビゲロウ寄贈品が、現在MFA日本美術の中核を成していることは周知の事実です。

遺骸はトリニティ教会の儀式に則り、ハーバード大学の東方ケンブリッジのマウント・オーバン墓地に葬られましたが、遺言により天台教学の徒にふさわしく遺体を密教の法衣で包み、左手に愛用の数珠を掛けて葬ったと言います。(『MFA100年史』)。

ビゲロウもまた、かねてから法明院への埋葬の念願を山中商会の代表山中定次郎に語っていました。山中は関係者の了解と法明院の許可を取り付けた上、墓石、灯籠、玉垣の築造を京都の石材商石恒(佐脇恒吉郎)に依頼、2年後の昭和3年2月16日、分骨と遺品を携えて横浜に帰着しました。遺品の中に敬徳(敏円の誤りか)阿闍梨から贈られた金襴の袈裟や不動明王の掛物、水晶の数珠、托鉢などがあったことを、翌日の『大阪朝日新聞』は伝えています。

山中定次郎はこの時、貧弱だったフェノロサの墓域の改修をも併せ行い、昭和3年4月27日、その竣工とフェノロサ、ビゲロウ追悼を兼ねた記念の大茶会を催し、招請した故人の知己友人始め多数の名士と共にその霊を慰めています。(『山中定次郎伝』)

【47】ジェームス・H・ウッズ博士のこと

ハーバード大学でのビゲロウ仏教講座聴講者のなかに、同大学サンスタリット語教授ジェームス・ホートン・ウッズ(James Haughton Woods, 1864-1935)がいました。絶対者との合一を目指すという

ヨーガの著名な研究者で主著“YOGA - SYSTEM OF PATANJALI” (1927)があります。ウッズは靈魂不滅をニルヴァーナに求めるビゲロウを仏教研究の師と仰いで熱心に聴講。師から天台学について作成されたノートに託されていました。

前述姉崎正治とは、かつてドイツで留学生同志として知り合い、その後家族ぐるみの親交を結んでいました。ハーバードへの姉崎招聘も、「ウッズの尽力による」ものだったと姉崎は自伝『わが生涯』で語っています。関東大震災で倒壊炎上した東京帝国大学図書館再建の隠れた援助功労者もウッズでした。当時兼任で図書館長だった姉崎教授は、同書で「再建の寄付はウッズの周旋に待つ所が多かった」と回想していますが、ハーバード大学からの多大な図書寄贈に加えて、ウッズの弟アーサーは図書館再建の建設費400万円を寄付したロックフェラー財団の有力理事だったのです。姉崎はアーサーとも熟知の間柄でした。

ウッズはハーバード大学を定年退職したのを機に、今や三井寺に眠るビゲロウから渡された天台密教ノートを整理出版し、かたがた自分も天台学研究に後半生を捧げるつもりで、夫人同伴来日しました。1934年(昭和9年)12月14日のことです。

姉崎はウッズの仕事の補佐を、ハーバード時代に助手として帯同した矢吹慶輝(1879-1939)と岸本英夫(1903-1964)に依頼しました。前者は大正大学学長、後者は姉崎の教え子で女婿となった若き宗教学者、ハーバード留学時代にウッズのお世話になった一人です。

二人の専門家はウッズに是正を依頼したというビゲロウのノートを見て吃驚します。ビゲロウと阿闍梨との真剣な問答はよく分かるのですが、英語を知らぬ阿闍梨と仏教に疎い通訳者により、天台学がきわめてミステリアスな信仰となっていること、また死後の世界、靈魂説への関心が異常に強く天台学の本質から外れていること、などでした。まずこの部分の訂正から始めなければなりません。天台密教に造詣の深い浅草寺の清水谷恭順師がウッズの顧問インストラクターに選ばれます。講義は1月中旬からと決まりました。

【48】ウッズの急死 法明院の供養塔

正月の休みが終わって9、10、13日の3回、帝国ホテルのウッズの部屋で天台学予備講義が、矢吹講述、岸本通訳の形で行われます。ウッズを大いに満足させたこの予備講義が終わった翌14日の昼

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(X)続き

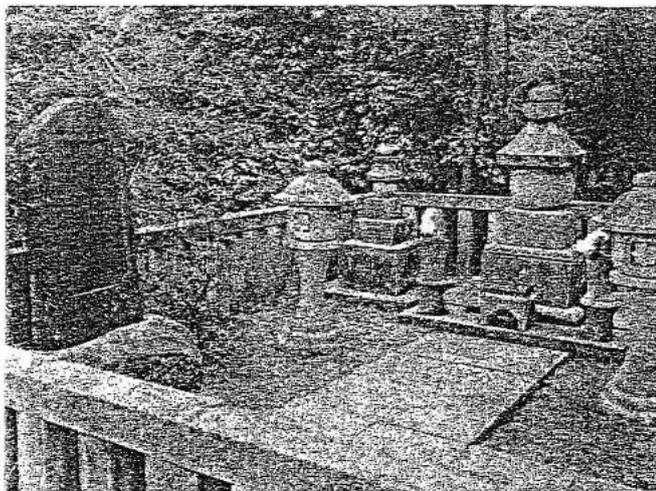
過ぎ、大学の岸本研究室に突然の電話が入り、ウッズ急死の知らせが飛び込んできたのです。脳卒中、71歳でした。

17日青山のトリニティー教会で告別式。姉崎正治は長年にわたる交遊を胸に秘めて弔辞を捧げ、法華経の一節をサンスクリットで誦唱。桐ヶ谷で火葬されました。

遺骨が日本を離れる前にということで19日、仏式の葬儀が浅草寺で営まれています。友人以外に個人と面識のない著名な仏教者たち数十人が参列、異郷で急逝したアメリカの仏教学者を哀悼したことが、岸本英夫を感激させます。(岸本 'Professor Woods and His Last Visit to Japan' "Harvard Journal of Asiatic Studies", April 1936)

1月15日の『東京朝日新聞』はウッズ博士の急逝を詳しく報じています。末尾に「姉崎博士の談」として「・・・遺骨の一部は師(ビゲロウ)の眠る三井寺に葬ろうと、今考えている所です」を載せています。

ウッズの一周忌、法明院ビゲロウの墓域の中に、ビゲロウに寄り添うようにウッズ供養の五輪塔が建てられました。



法明院 ビゲロウの墓域

【49】おわりに

長い間のご愛読ありがとうございました。思えば2007年5月25日の日本ボストン会有志による法明院参拝がキッカケでした。あの時、病気を押しつけて接待された滋野敬淳大阿闍梨も故人となられました。

フェノロサ、ビゲロウの墓が法明院に作られた経緯については、主として旧著『フェノロサ—日本文化の宣揚に捧げた一生』(上下巻、1982年、三省堂)に拠り、その後の著述や蒐集した資料によって補足したのですが、当時ビゲロウの墓域にあるウッズの供養塔には全く関心がありませんでした。ウッズ最後の訪日の事情やビゲロウの仏教ノートの内容は、本会会員三好彰様のご教示に負う所大なるものがあります。この場を借りて感謝申し上げます。また5校、6校に及ぶ修正に辛抱強くお付き合い頂いた編集の俣野善彦様にも謝辞を捧げます。ありがとうございました。

書き終えて改めて感じるのは因縁の不思議さです。ウッズが天台学に興味を持ったキッカケがビゲロウだったこと、ウッズの友人姉崎正治はフェノロサの教え子だった井上哲次郎直系の後継者であったこと、また姉崎を継いだ宗教学者岸本英夫の父は、明治30年11月フェノロサが東京専門学校(現早稲田大学)で講演した「東西文明の比較一斑」で通訳を務めた高等師範学校教授岸本能武太だったことなど。岸本英夫先生の講義には、私も専攻学科は違いましたが聴講したことがありました。謹厳な感じの先生でした。先生の編纂された『明治文化史 宗教編』(昭和29年)は、裨益する所の大きかった著作です。

2010年9月15日

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

フェノロサの「遺著」として *EPOCHS OF CHINESE AND JAPANESE ART* (1912) (森東吾訳『東洋美術史綱』)が挙げられます。しかしこの著は未亡人メアリが亡夫の講演草稿等を、発表年次に順着することなく編集したもので、たとえば浮世絵や文人画についての見解など後年かなり修正されているのですがその言及はありません。当然ながら本人の校閲を経ているものではなく、このことは数十点におよぶ「邦訳」についても言えることで、訳者の意向が混入していないと断言することはできません。

幸いなことに2009年、フェノロサ没後100年(実際は101年になってしまいましたが)エディション・シナプス社からフェノロサ生前の『英文著作集(復刻版)』全3巻を刊行していただきました。ここに、その目次を掲載した出版時のパンフレットを紹介します。

なお、以前『フェノロサ美術論集』(1988年 中央公論美術出版)・『フェノロサ社会論集』(2000年 思文閣出版)として邦訳ものをまとめたことがあります。合わせてその目次を別項に転載しました。フェノロサ生涯の業績として、参考にご供することができれば幸いです。

著者による主なフェノロサ関係著書・文献等紹介：

- * 「フェノロサと日光」『鵬』第6号(2011年) 岡倉天心研究会
- * 『フェノロサ英文著作集』【復刻版】(全3巻+別冊解説解題編) 2009年エディション・シナプス(英文目次別項参照)
- * 「ラファディオ・ハーンとフェノロサ夫妻」2009年 『ハーンの人と周辺』 新曜社
- * 「フェノロサと浮世絵—とくに北斎評価をめぐって—」2003年
『北斎研究』第33号 葛飾北斎美術館
- * 「北斎とその流派」(フェノロサ著翻訳)2001年
『美学美術史』第16号 実践女子大学美学美術史学会
- * 『フェノロサ社会論集』2000年 思文閣出版 (目次別項参照)
- * 「バートレット夫人宛メアリ・フェノロサ書簡13通について」1992年、
“LOTUS”13号 日本フェノロサ学会
- * フェノロサ著「ルイ・ゴンス《日本美術—絵画篇》批評」(翻訳)1988年
“LOTUS”第18号 日本フェノロサ学会
- * 「フェノロサと芳崖：その出会いをめぐって」1989年
『没後百年狩野芳崖展図録』掲載論文 京都国立博物館
- * 『フェノロサ美術論集』1988年 中央公論美術出版 (目次別項参照)
- * 『フェノロサ：日本文化の宣揚に捧げた一生』(上下2巻)1982年 三省堂
- * “UNPUBLISHED LETTERS OF ERNEST F. FENOLLOSA TO
CHARLES L. FREER”
1976年『埼玉大学紀要人文科学編』第25巻 および
1977・79・81年『埼玉大学紀要外国語学文学編』第11・13・15巻に連載。

付録 1

*『フェノロサ美術論集』1988年 目次

1. 『美術真説』大森惟中筆記、単行書(龍池会蔵版)、明治15年11月刊。
 2. 『鑑画会組織』岡倉覚三訳、鑑画会、明治18年。
 3. 日本画題の将来、有賀長雄訳、『大日本美術新報』第19・21号、明治18年。
 4. 画題に仏教を用ゆるの得失、『令知会雑誌』第15号 明治18年。
 5. 鑑画会大会批評『大日本美術新報』第23号。明治18年。
 6. 日本美術工芸ハ果タシテ欧米ノ需要ニ適スルヤ否、津田道太郎訳、『大日本美術新報』第43-45号 明治18年。
 7. 第二回鑑画会大会出品新画の目的に就きて『大日本美術新報』第29号 明治19年。
 8. 第二回鑑画会演説、『大日本美術新報』第30・31号 明治19年。
 9. 洛東丸山中村楼における演説、『日出新聞』明治19年6月13日-20日号
 10. 鑑画会席上(渡欧訣別)演説筆記、『大日本美術新報』第35号 明治19年。
 11. 鑑画会フェノロサ氏(帰朝)演説筆記、『大日本美術新報』第49号 明治20年。
 12. 日本美術工芸の将来如何、『郵便報知新聞』明治21年2月28・29、3月2日号。
 13. 霊性の三元素(真、善、美)、『哲学会雑誌』第2冊16号 明治21年。
 14. 奈良ノ諸君ニ告グ、『日出新聞』明治21年6月10日号。
 15. 美術工芸品購入者の注意十五則、『美術』第1号 明治22年。
 16. 西洋及日本ノ美術、『新演説』第3・4号 明治22年。
 17. 美術哲学概論、『国華』第2号 明治22年。
 18. 美術ニ非ザルモノ、『国華』第5号明治23年。
 19. 日本美術協会演説大意、有賀長雄筆記、『日本美術協会報告』第109号 明治30年。
 20. 美術に於ける裸體の濫用、『国民之友』第366号 明治31年。
 21. フェノロサ氏の日本絵画論、『日本美術』第3号 明治31年。
 22. 『真美大観』序、日本仏教真美協会刊、明治31年。
- (浮世絵の諸文)
23. 浮世絵史考、『国華』第1・2・4・6・8号 明治22-23年。
 24. 『浮世絵展覽会目録緒論』蓬枢閣(小林文七)発行 幸田成友訳、明治31年。
 25. 北斎及其流派、平田禿木訳、『西人の見たる日本浮世絵』(アカギ叢書)所収 大正3年

(付録)

26. 鑑画会.....烟霞散人
『大日本美術新報』第34号 明治19年。
27. 煙霞山人鑑画会ノ評を読ム.....無碍道人
同上号
フェノロサ年譜
解題.....山口静一

付録 2

*『フェノロサ社会論集』2000年 目次

- 御雇外国人教師エルネスト・F・フェノロサ
序に代えて.....山口静一
- I 東京大学における政治学・理財学・哲学講義
(試験問題、文部大臣への申報、講義概要)
『東京大学年報告』『東京大学一覽』
 - II 宗教の原因及ヒ沿革論(傍聴記).....
『芸術叢誌』(明治十一年十二月~十二年三月)
 - III 政治学講義.....
刊行年不明
 - IV 世態開進論.....
井上哲次郎・和田垣謙三・木場貞長訳
『学芸志林』(明治十三年七・八・十月号)
 - V 学位授与式祝辞(学生の政治活動を戒める)
有賀長雄訳
『学芸志林』(明治十五年十二月)
 - VI 霊性ノ三元素(真・善・美).....
『哲学会雑誌』(明治二十一年五月)
 - VII 中国および日本の特徴.....山口静一訳
『アトランティック・マンスリー』(一八九二年)
 - VIII 詩集『東と西』序文.....山口静一訳
(明治二十六年十月十五日記)
 - IX 東西文明の比較一斑.....岸本能武太訳
『東京専門学校文学部第二回三年級講義録』
(明治三十年)
 - X 内地雑居に関して日本の教育の将来を論ず
有賀長雄訳
『教育公報』(明治三十一年一月号)
 - XI 来るべき東西の融合.....山口静一訳
『ハーバース・ニュー・マンスリー・マガジン』
(明治三十一年十一月号所載)
 - XII 世界史上日本の位置(東西思想の大融合者)
 - XIII 外人の眼に映ずる日本.....
『読売新聞』明治三十二年一月二十一日~二十六日
- 付録1 長詩『東と西』.....大久保直幹訳
1893(明治二十六年)
- 付録2 フェノロサ年譜.....山口静一編
- 付録3 JAPAN'S PLACE IN HISTORY
『ザ・オリエント』1899(明治三十二年)年一月
所載
あとがき.....山口静一

フェノロサ没後 100 周年記念出版

フェノロサ英文著作集 【復刻集版】 全 3 巻 + 別冊解説

Ernest Francisco Fenollosa: Published Writings in English in 3 volumes

編集・解説 ◆ 山口静一 (埼玉大学名誉教授)

(Series: Collected Works of Japanologists)

「日本美術の恩人」と称されるフェノロサの英文著作の初の集成です。

明治 11 年に米国より来日し、前年開校した東京大学政治学、理財学、哲学教授に着任したお雇い外国人フェノロサは、教育者として、後の日本教育界をリードすることになる多くの人材（井上哲次郎、岡倉天心、嘉納治五郎、高田早苗など）を育てますが、同時に、西洋崇拜の明治にあって見捨てられていた日本の伝統美術を高く評価し、美術品収集、研究を進め、岡倉天心とともに東京美術学校の創立に尽力します。米国帰国後もボストン美術館日本美術部キュレーターを務め、米国での日本美術の紹介や、ボストンだけでなくフリーア美術館など米国での代表的日本美術コレクションの礎をつくったことでも知られています。

しかし、その業績や人物に対する評価に比べると、詩集 *East and West* のほかには大きな単行本著作を残さず急逝したフェノロサの執筆活動や著作に対する研究は、未だ限定的にしかなされていないといえます。前述の詩集や、死後未亡人メアリー・フェノロサが遺稿をまとめた *Epochs of Chinese and Japanese Art*、そしてエズラ・パウンドがフェノロサ訳として編んだ謡曲集、そして日本での講演の日本語による記録など

が現在でもフェノロサの著書として一般に言及されていますが、フェノロサ自身が日本語をほとんど解さなかったことなどを考慮すると、これらの出版物のどこまでを本来の彼の著作とするのかは、議論が分かれるところでしょう。

没後 100 年を期に編集される今回の著作集は、フェノロサが自らの名前で活字化していたほぼすべて（ペーパーバック等で刊行されている詩集 *East and West* および遺著 *Epochs of Chinese and Japanese Art* を除く）の文献を復刻にて収録します。ハーバード大学卒業文集に発表した長詩や、東京大学で出題した試験問題から、日本の英字新聞や雑誌に投稿されたゴンズやアンダーソンの日本美術書への書評や日本文化論、美術展カタログへの解説、シカゴ万国博覧会の教育会議での発表、帰国後アメリカの雑誌に発表された美術論や美術教育論など計 51 点の文献を全 3 巻に収録しました。そのほとんどが初出後初めて再刊されるものです。編者による別冊解説、そして巻末には編者がフェノロサの業績と参考事項を詳説する年表と、夫人メアリーの浮世絵に関する論文 2 点を付録しています。

今後のフェノロサ研究、近代日本美術史、米国・西洋での日本美術の受容の研究には必携の文献です。

CONTENTS:

VOLUME 1

Introduction by Seiichi Yamaguchi

1. Poem read at the Class-day Exercises, *Baccalaureate Sermon and Oration and Poem: Class of 1874*, 1874, pp.33-46.
2. Poem read at the annual reunion of the High School Association on Nov. 26, 1875.
3. Examination Questions of Political Philosophy, Political Economy and History of Philosophy for the Academic Year 1878-1879 and 1879-1880, The University of Tokio, *The Calendar of the Department of Law, Science, and Literature, 1879-80, 1880-81*.
4. Review of the Chapter on Painting in Goussier's *L'Art Japonais*, Printed at the "Japan Mail" office, Yokohama, 1884.
5. The Pictorial Art of Japan, Blackwood's *Edinburgh Magazine*, No.855, 1887, pp. 281-290.
6. The Morse Collection of Japanese Pottery, Pamphlet, Museum of Fine Arts, Boston, Feb 14 1891, pp. 4-7.
7. The Significance of Oriental Art, *The Knight Errant*, No. 1, April 1892, pp. 65-70.
8. Chinese and Japanese Traits, *The Atlantic Monthly*, Vol. 69, June 1892, pp.769-774.
9. *Hokusai and His School. Special Exhibition of the Pictorial Art of Japan and China, No.1. Catalogue*, Department of Japanese Art, Museum of Fine Arts, Boston, 1893.
10. Contemporary Japanese Art with Examples from the Chicago Exhibit, *The Century Illustrated Monthly Magazine*, Vol. 46, August 1893, pp. 577-581.
11. Preface to *East and West, The Discovery of America and Other Poems*, Thomas Y. Crowell & Co., New York, 1893. pp.v-vii.
12. Studying Art - Discussion, *Proceedings of the International Congress of Education of the World's Columbian Exposition, July 1894*, pp.472-473.
13. Imagination in Art, Introductory Remarks, *Annual Report of the Boston Art Students' Association*, No. 15, June 1894, pp.3-11.
14. *An Exhibition of Japanese Paintings and Metal Work, lent by F. Shirasu, of Tokio, Japan, Catalogue*, Department of Japanese Art, Museum of Fine Arts, Boston, June 1894.
15. *A Special Exhibition of Ancient Chinese Buddhist Paintings, lent by the Temple Daikokuji, of Kyoto, Japan, Catalogue*, Department of Japanese Art, Museum of Fine Arts, Boston, December 1894.
16. Introduction to *Special Exhibition of Color Prints: Designed, Engraved, and Printed by Arthur W. Dow, Catalogue*, Museum of Fine Arts, Boston, April 1896, pp.3-6.
17. Synopsis of Lectures: The History of Japanese Art, at the Association Hall, Boston, March-April 1895.
18. *Mural Painting in the Boston Public Library*, Curtis & Co., Boston, 1896.
19. *The Masters of Ukiyoe. A Complete Historical Description of Japanese Paintings and Color Prints of the Genre School*, Catalogue of Exhibition in New York, by W. H. Ketcham, January, 1896.
20. The Symbolism of the Lotos, *The Lotos = The New Cycle*, Vol. 9, No. 8, Feb. 1896, pp.577-583.
21. The Nature of Fine Art (1) & (2), *The Lotos = The New Cycle*, Vol. 9, No. 9 & 10, March & April 1896, pp.663-673 & 754-762.
22. Lectures at the Metropolitan Museum (attributed to EFF.), *The Lotos = The New Cycle*, Vol. 9, No. 9, March 1896, pp.731-733.

(続く)

Ernest Francisco Fenollosa: Published Writings in English in 3 volumes

23. Art Museums and Their Relation to the People (1) & (2), *The Lotos=The New Cycle*, Vol. 9, No. 11 & The Lotos (New Series), Vol. 1, No. 5, May & September 1896, pp.841-847 & 930-935.
24. The French Salon of 1896, *The Lotos* (New Series), Vol. 1, No. 5, September 1896, pp.950-961.
25. Miscellaneous Articles for *The Lotos=The New Cycle* (attributed to, or edited by EFF.)
 - 1) An Exhibition of Japanese Color Prints and Paintings, *The Lotos = The New Cycle*, Vol. 9, No. 8, pp.634-636.
 - 2) The Fine Arts, *The Lotos=The New Cycle*, Vol. 9, No. 8, pp.637-641.
 - 3) Arthur W. Dow, *The Lotos=The New Cycle*, Vol. 9, No. 9, pp.709-710.
 - 4) Lotos Leaves, *The Lotos=The New Cycle*, Vol. 9, No. 9, pp.727-731
 - 5) Color Studies, *The Lotos=The New Cycle*, Vol. 9, No. 10, p.771
 - 6) Lotos Leaves, *The Lotos=The New Cycle*, Vol. 9, No. 10, pp.811-816
 - 7) Art Notes, *The Lotos* (New Series), Vol. 1, No. 5, pp.986-990p.

VOLUME 2

26. *The Catalogue of a Representative Collection of Japanese Color Prints made by Ernest Francisco Fenollosa*, The Property of Mrs. Ernest F. Fenollosa, c. 1896.
27. Japanese Art from the World Point of View, *The Far East (Kokumin no Tomo)*, Vol. 2, No. 5, May 1897, pp.196-201.
28. The Abuse of the Nude in Art, *The Far East (Kokumin no Tomo)*, Vol.3, No.24, January 1898, pp.39-45.
29. *Catalogue of the Exhibition of Ukiyoe Paintings and Prints, held at Ikao Onsen, Uyeno Shinzaka, from April 15th to May 15th, 1898*, Bunshichi Kobayashi (Hōsūkaku), Tokio, April 1898.
30. *Catalogue of Japanese Color Prints Collected by Mr. Joseph H. Herod*, The Japan Gazette, Yokohama, 1898.
31. An Outline of Japanese Art - with Unique and Unpublished Examples, Part 1 and Part 2, *The Century Magazine*, Vol. 56, Nos. 1-2, May-June 1898, pp.62-75 & 276-289.
32. The Present Exhibition of Painting, *The Japan Weekly Mail*, Nov. 12 1898, pp.487-490.
33. The Coming Fusion of East and West, *Harper's New Monthly Magazine*, Vol. 98, December 1898, pp.115-122.
34. Japan's Place in History, *The Orient*, Vol. 14, No. 1, January 1899, pp.9-15.
35. Preface, *Selected Relics of Japanese Art "Shimbi Taikwan"*, edited by S. Tajima, Kyoto: Nippon Bukkyō Shimbi Kyōkwai, Kyoto, May 1899.
36. Epithalamial Ode, *The Japan Weekly Mail*, May 12, 1900, p.462.
37. Notes on the Japanese Lyric Drama, *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 27, December 1900, pp.129-137.
38. *An Outline of the History of Ukiyoye: Illustrated with Twenty Reproductions in Japanese Wood Engravings*, Bunshichi Kobayashi (Hōsūkaku), Tokyo, September 1901.
39. *Catalogue of the Exhibition of Paintings of Hokusai, held at the Japan Fire Art Association, Uyeno Park, from 13th to 30th January, 1900*, Bunshichi Kobayashi (Hōsūkaku), Tokio, September 1901.

VOLUME 3

40. Possibilities of Art Education in relation to Manual Training, *Journal of the Proceedings and Addresses of the 41st Annual Meeting, The National Educational Association at Milwaukee, Wis., July 1902*, pp.564-570.
41. The Place in History of Mr. Whistler's Art, *Lotus*, No. 1, December 1903, pp.14-17
42. *Catalogue de luxe of the Art Treasures collected by Thomas E. Waggaman, Japanese Pictorial Art — Rare Screens, Prints and Paintings*, The American Art Association, New York, January 1905.
43. Illustrated Lectures on Japanese Art and Literature, Pamphlet introducing a course of six lectures, c. 1905.
44. A Course of Seven Illustrated Lectures on the Foundations of Criticism and Education in Art, Synopsis of "a course of 7 lectures" in Indianapolis, February to March 1905
45. The Fine Arts, *The Elementary School Teacher*, Vol. 5, July 1904 - June 1905, pp.15-28.
46. The Bases of Art Education — I: The Roots of Art, II: The Logic of Art, III: The Individuality of Artist, *The Golden Age*, April, May, June 1906, pp.160-162, 230-235 & 280-284.
47. *Epochs of Chinese and Japanese Art: A Course of Twelve Lectures*, with List of Names used in the Lecture, at the American Institute Hall, New York, February 19th 1907, Yamanaka & Co., 1907.
48. The Collection of Mr. Charles L. Freer, *Pacific Era*, Vol. 1, No. 2, November 1907, pp.57-66.
49. *Catalogue: The Exhibition of Ukiyoe Paintings and Prints at the Yamanaka Galleries, New York, Yamanaka & Co., New York, February 1908*.
50. Modern Spanish Art to the Fore in the Salon of Nineteen Hundred and Eight: Decadence of French Influence, *The Craftsman*, Vol. 14, No. 6, September, 1908, pp.571-586.
51. *The Chinese Written Character as a Medium for Poetry*, (Posthumous essay originally published as "An Essay on the Chinese Written Character..." in *Instigations of Ezra Pound*, 1920.), Arrow Editions, New York, 1936, pp.7-52.

Appendix (I)

1. Chronological Record of Fenollosa's Career, compiled by Seiichi Yamaguchi.

Appendix (II): Mary McNeil Fenollosa's Writings on Ukiyoe

1. Suzuki Harunobu
The Lotos, Vol. 9 No. 10, 1896, pp.775-778.
2. Hiroshige, *The Artist of Mist, Snow and Rain, An Essay with Illustrations and Facsimiles of Some Famous Signatures*, Vickery, Atkins & Torrey, San Francisco, 1901.

Supplement: Introduction and notes in Japanese by Seiichi Yamaguchi



Mary McNeil Fenollosa



日本ボストン会 20 周年記念講演(要旨)

フェノロサとビゲロウ

山口 静一

本誌連載記事を増補し小著『三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語』を出版させていただきましたが、創立 20 周年記念行事の一環として講演の機会を与えてられましたこと、まことに光栄の至りであります。

フェノロサは美術関係のみ喧伝されておりますが、12 年間の在日生活を終えて帰国した時、日本を手本にアメリカ社会を改革しようという抱負を手記に残しています。同胞意識と犠牲的精神、平和と寛容、協調と人類愛に象徴される菩薩の心——これが日本人の特性だと言うのです。いささか面映ゆい感じですが、明治の日本には外国人にそう感じさせるものがあつたのでしょうか。或いは強烈な自己主張に貫かれて異民族を排除し続ける西洋を暗に批判したのかもしれませんが。

やがてその熱意は東西融合の思想へと展開し、帰国後 3 年目のシカゴ万博に合わせて刊行された詩集『EAST AND WEST』に結実することになります。その経緯は概ねレジメのとおりです(別項参照)。西洋の男性的力と東洋の女性的な美、これが美術と宗教すなわち美と愛を媒人的として結婚し一体となった新世界の実現——それがフェノロサの理想でした。

今回の講演では、冒頭ウイリアム・S・ビゲロウの事績を紹介しました。ビゲロウはフェノロサの蔭に隠れたように思われた存在でしたが、フェノロサ

の追悼文で岡倉天心が述べているように、フェノロサをして名を成さしめたのは実はビゲロウでした。フェノロサの美術運動を経済的に援助したばかりか、友人ウエルドにフェノロサ蒐集絵画を購入させてボストン美術館(MFA)に遺贈させ、同館に日本美術部を新設して帰国後のフェノロサをキュレーターに着任させたのもビゲロウの斡旋によるものでした。その上MFA理事となって自ら蒐集した数万点にのぼる多様な文化財(絵画、彫刻、刀剣、陶磁器、漆器、根付、衣装、古書籍など)を寄贈し、MFAを世界に冠たる日本美術の宝庫としたのもビゲロウでした。

明治政府はビゲロウに勳三等旭日章を授与しました。勳記は日本美術を世界に紹介した功績を称えています。明治の日本人は国際的視野が広がったようで、現在のように文化財を流出させたというような近視眼的な見方をしていません。

フェノロサはスペイン系の二世、モースはメイン州ポートランド出身でしたが、ビゲロウは父ヘンリーがハーバード大学医学部教授で大統領侍医、祖父ジェイコブもハーバードで医学と生物学を教えた医学者でMIT創設に関わったという、生粋の名門ボストニアンでした。ウイリアム・S・ビゲロウこそ日本とボストンを結ぶもっとも重要な人物だったと、いって過言ではないと思います。

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館館長)

日本ボストン会創立 20 周年記念行事(2012 年 11 月 10 日開催)

フェノロサ： 東西融合の思想 (レジメ)

山口 静一

I 1901 年フェノロサ手記 Houghton Library フェノロサ資料 bMS Am1759.2 (60)

ボストン美術館での 5 年間、フェノロサは日本文化・日本美術の宣揚に目覚ましい業績をあげた。美術館就任の翌年すなわち 1891 年 5 月 1 日の日付で、彼は将来の抱負を綴った手記(全 12 章、ノートブック 4 ページ)を書き残している。

自分は極東の古い文化に共感を持ったが、アメリカ人としてアメリカ文化の向上に寄与したい。個性と社会との調和を図り、美術を社会機能の重要な要素たらしめるには自分が最適であると自負している、

第 12 章梗概

美術家の能力といえども政治的、経済的現実に左右されるのは当然で、現実に背馳した美術の発展は考えられぬが、それにしてもアメリカ国民一般の美術的無関心さを黙視することはできない。彼らに適切な美術教育を施し、新しい意識の社会を作り出すことによって、少

フェノロサ：東西融合の思想(つづき)

なくともアメリカの都市や住宅をもっと美的なものにしよう。その規範は日本人の美的感覚にある。それをはぐくんだ日本人の仏教理念——同胞意識と犠牲的精神、平和と寛容、協調と人類愛に象徴される菩薩の心——に学ばなければならない。

II 中国および日本の特徴、Chinese and Japanese Traits、*The Atlantic Monthly* June 1892

結論部分抄訳

…遠い将来中国が軍事的大国に発展しヨーロッパ連合が東方の戦略基地に関心を向けざるを得ぬ時期が到来するかもしれない。しかしそれ以上に可能性の大きいのは、入念に仕上げられた優美さと超俗的な理想と、創造性豊かな個性によってインスピレーションを発揮した日本の完璧な美術品——これが宝船に満載されて西欧の自由市場に侵入し、その靈劍を以って全世界を平和のうちに征服する日の近いことである。

それ故に、理論的にも実際的にも、日本のとるべき最善の道は日本が東洋的伝統の理念をしっかりと保持して行くことだと私は信じている。この道こそ日本が人類に対して果たすべき重大なる任務であり、日本こそこの聖火を守る最後の国である。日本は西洋の仰々しい材料を用いてその炎を再び燃え上がらせようとする一方、西洋文明が迷い込んだ物質主義の幻影を見通す不思議な力を持つ唯一の国である。東洋と西洋という二つの類型の融合を図ることは、2000年前アレキサンダー大王がギリシャの国境をインドに接せしめて以来今や二度目の機会であり、かつていずれの一方も想像しえなかったほどの完成した文明を東西両洋に創り出す可能性を秘めているが、日本こそ我々の最も注目すべき先達者となる測りがたき力をもつ国である……。

III 長詩 EAST AND WEST の朗読

ハーバード大、ファイ・ベータ・カッパ (ΦBK) ソサエティにて、June 30, 1892

IV 詩集 EAST AND WEST, THE DISCOVERY OF AMERICA and OTHER POEMS,
Thomas Y. Crowell & Co., New York, October 1893

PREFACE

EAST AND WEST 目次 及び概要

PART I The First Meeting of East and West

アレキサンダー大王の東征による一時的な古代東西文化の融合。両者を代表する二人の天使がそれぞれの辿った運命を語り、再会を約して別れて行く。

PART II The Separated East

フェノロサの霊が亡き狩野芳崖の霊に導かれてインド、西域、中国、と美術遍歴の旅を続け、最後に到達した日本に理想的な社会を見出す。やがて日本の宗教に心惹かれ、亡き桜井敬徳の霊の指導で仏教の世界を探る。

PART III The Separated West

西洋文明発達歴史。科学、貿易の進展により西は一方的に東を求めるが、二人の天使はこれが正しい出会いでないことを語る。

PART IV The Present Meeting of East and West

明治維新後の日本の現状。東は西に圧倒され、西の目的無き物質文明を模倣するばかりであることを批判。

PART V The Future Union of East and West

フェノロサの理想。西洋の男性的な力と東洋の女性的な美とが、美術と宗教の力すなわち美と愛の力を媒酌人として結婚し一体となり、もはや東も西もない涅槃静寂の境地
以上

日本ボストン会 20 周年記念講演会レジメ資料 フェノロサ・ビゲロウ 略年譜 山口 静一

西暦	年号	摘 要	通巻
1853	嘉永6	2月18日 フェノロサ、マサチューセッツ州セーラムにて生まれる。	3
1876	明治9	6月 フェノロサ、ハーバード大学大学院修了。	4
1877	10	6月17日 モース(39歳)来日、9月に東京大学理学部教授に就任。2年間勤務。	3
1878	11	6月12日 フェノロサ、25歳、リジー(25歳)と結婚、7月20日、サンフランシスコから日本へ。 8月9日 横浜着、翌10日、東京大学と契約、文学部教授に就任。	4 4
1882	15	6月5日 ビゲロウ(32歳)、モースと共に来日。以後8年間、フェノロサと共に美術品収集。	7
1884	17	11月30日 ビゲロウ宅を赤松連城(43歳)訪問、フェノロサも来訪。仏教対話。	8
1885	18	6月27日 フェノロサ、仏教ノートを残す。(ハーバード大学ホートンライブラリー所蔵。) 9月21日 フェノロサとビゲロウ、町田久成(47歳)私邸にて三井寺法明院桜井敬徳(51歳)に受戒。法名、フェノロサ 諦信、ビゲロウ 月心。	9 10
	秋	来日中のウエルド、フェノロサの蒐集美術品を買収。のちにMFAに遺贈。	7
1886	19	8月1日 フェノロサ、帝国大学(改称)より文部省・宮内省美術行政官に転職。 10月2日 フェノロサと岡倉(23歳)、ビゲロウを同伴、美術事情調査のため欧米に1年間出張。	7 10
1889	22	12月24日 桜井敬徳(55歳)の示寂。	11
1890	23	6月 フェノロサ、37歳、契約満了で文部省(東京美術学校幹事)・宮内省(帝国博物館理事)辞任、翌月家族・ビゲロウと帰国。 7月 ビゲロウ、MFA理事に就任。	11 11
		9月1日 フェノロサ、MFA美術館の新設日本美術部キュレーターに就任。(5年契約)	12
1891	24	5月1日 フェノロサ、帰国の抱負をノートに書き残す(ホートンライブラリー蔵)。	13
1893	26	10月 シカゴ万博に際し長詩『東と西』を発表。	13
1895	28	9月 フェノロサ、予定の美術品目録完成せず、助手メアリとの関係スキャンダル化し休職。 10月2日 リジー夫人との離婚が成立。	14 15
		12月8日 フェノロサ(42歳)、メアリ(30歳)とニューヨークにて結婚。	15
1896	29	1月 ニューヨークにて、「浮世絵の巨匠たち」を刊行。 4月 MFA理事会フェノロサへ無期休職を通告。フェノロサは辞表を送付し、新夫人と欧州へ。 7月9日 フェノロサとメアリ、英仏を回遊後、横浜に到着。	16 16 16
1898	31	4月 フェノロサ、解説目録『浮世絵展覧会目録緒論』(英文、和文)を刊行。	16
1900	33	8月17日 フェノロサ夫妻帰国、漢詩・能楽に関する研究成果を纏める。	16
1901	34	5月14日 フェノロサ夫妻、来日4ヵ月滞在。以降米国にて巡回講師の生活に入る。	17
1902	35	10月 メアリの実家アラバマ州モービル市郊外にマイホームを新築。	17
1903	36	3月 フェノロサ、ルーズベルト大統領に招待され、日本の立場擁護の講演を行う(21・27日)。	17
1908	41	5月1日 フェノロサ、ニューヨーク山中画廊『浮世絵展』目録執筆を終え、ヨーロッパ歴訪に出発。 9月21日 フェノロサ、ロンドン滞在中に狭心症で急逝、享年55歳、ハイゲート墓地に埋葬された。 9月26日 訃報はセーラムの新聞に報じられ、翌日、日本の新聞で報道す。	18 18 18
		10月 ビゲロウ、「インガソル講座」に引き続き、ハーバード大学にて仏教講義。	24
		11月2日 フェノロサの追悼文がハーバード大学クラスメートによって公表される。	19
		11月29日 フェノロサ追悼法要が上野寛永寺に於いて執り行われた。	19
1909	42	4月 メアリ、故人の遺骨を日本に改葬したい旨をニューヨークの山中商会に打診。 9月21日 フェノロサの遺骨は山中商会の手でシベリア鉄道經由敦賀到着、即日三井寺法明院に埋葬される。	20 20
		10月 フェノロサの墓碑完成。翌月フェノロサの一周忌法要が法明院にて挙行される。	21
1910	43	春 メアリ、娘アーウィンを伴い来日。夏、ロンドンに向かい、ハイゲート墓地に記念碑建立	
1926	大正15	10月6日 ビゲロウ、76歳で死去。ケンブリジのマウント・オーバン墓地に埋葬される。	25
1928	昭和 3	2月16日 山中定次郎、ビゲロウの分骨と遺品を携えて横浜に帰着した。 4月27日 三井寺法明院にビゲロウ墓碑完成。法要と茶会が開催された。	25 25
1934	'9	12月14日 インド学者ウッズ博士、ビゲロウの仏教研究遺稿を携えて来日。	25
1935	10	1月14日 ウッズ、天台学受講後、帝国ホテルにて急逝。後に法明院ビゲロウ墓域に記念碑建立。	25

美術と歴史の会

岡倉天心記念六角堂訪問記(2014年5月20日開催)

歴史を飲もう会では、1998年1月、岡倉天心ゆかりの北茨城市大津町六角堂を訪れ、現地(平潟港)に一泊していた。(篠崎史朗、会報第11号)。

太平洋に面する茨城県五浦(いづら)海岸の怪石巨石の連なる景勝地に、岡倉天心の邸宅の一部として六角堂は建てられていたが、2011年3月11日の東日本大震災津波で消失した。施設を運営管理している国立大学法人、茨城大学五浦美術文化研究所には、史跡の消失を憂えた有志の募金がいち早く寄せられ、翌年4月には六角堂が再建され、翌5月に五浦六角堂再建記念「五浦と岡倉天心の遺産展」が日本橋・高島屋で開催されていた。亦、去年は天心没後100年にあたっていた。

今回、参加者18名は5月20日(火)午前8時に東京駅・丸ビル前をツアーバスで出発、常磐自動車道・友部SAで小休止し、北茨城ICから国道6号を経て、茨城大学五浦美術文化研究所(旧岡倉天心邸)に午前10時半過ぎに到着した。

待ち受けておられた茨城大学教授で天心研究者である小泉晋弥先生のご案内で、入り口(長屋門、登録有形文化財)から天心遺跡として保存されている構内に入り、すぐ左手に設けられている天心記念館にて岡倉天心の中国風の衣服を纏い、釣竿を手にした木像(平櫛田中作)や天心が使用した釣り船竜丸丸などを見てから、ルートに従って、第二次世界大戦中の爆撃対象から外す日本の文化財リストをアメリカ政府に提出したといわれる、天心の教えを受けた美術史家ラングドン・ウォーナーの肖像及び覆堂建立の経緯を伺い、海岸に向かう小道を歩む。途中海を臨める天心邸の前を更に下ると、海に突出した岩場の上に木造の小さな六角堂が建てられていた。

六角堂の中は板張りで、中心に六角形の小さな茶席の炉が仕切られていた。詰めれば20人程度が座れる広さしかなく、海を眺めることのできる茶室であった。建物全体は創建当時のベンガラ色彩に戻され、棧瓦(8寸幅)も創建時の仕様で葺替えられ、海底調査で発見された六角柱の水晶を収めた宝珠が六角形の屋根の中心に取付けられた。(注:津波消失により登録有形文化財の認定は取り消されている。) 出窓には当時の製法による板ガラスがイギリスに特注されて使用されていた。(残されている創建時の契約書の見積もりの中に、ガラスが外されていたことから、天心自身がボストンから持ち帰ったと考えられるボストン美術館のガラスと同じ大きさのものが使用されたとのことをお話を伺った。)

六角堂から険しい小道を戻り、前庭にボストンから取り寄せたと言われる芝生が眺められる母屋(旧天心邸、登録有形文化財)には、天心が住んだといわれる古い料亭(観浦楼)の古材が再利用されていて、天心らしい邸宅といわれている。天心邸をバックに小泉先生を交えて記念写真を撮影した。(東日本大震災の津波の遡上高は10.7m、庭園全体が浸水、岡倉邸南東側廊下直下に達した。)

天心邸から少し外れた西脇に建てられた石碑には、天心がインドで執筆した『*The Ideals of the East*』(東洋の理想)の冒頭に記された“Asia is one”を訳した「亜細亜ハ一なり」が記されている。昭和17(1942)年、日本が連合軍と戦っていた大東亜戦争(戦時中、日本国内での呼称)の意義を訴える趣旨で企画され、天心遺蹟顕彰会メンバー(横山大観、資生堂社長・福原信三ら)による建立であった。

この後、取り壊された土蔵の跡を見て、天心遺跡の拝観を終えてご案内をいただいた小泉先生にお別れした。時間も正午を少し過ぎおり、隣接地に在るホテル別館大観荘の窓から奇岩や六角堂も眺められるお部屋で昼食、昼食後に旧横山大観の屋敷跡に建てられた五浦観光ホテルに移り、旧横山大観邸が移築されてホテルの別棟として利用されている部屋を拝見した。

ツアーバスは午後2時15分に出発し、天心記念五浦美術館を訪ねた。場所は六角堂から国道6

号線に戻る道の右側の太平洋を一望できる高い丘の上に建てられていた。岡倉天心記念室には岡倉天心の多方面にわたる業績を顕彰し、天心の遺言状、天心が書き上げたオペラ「The White Fox」(白狐)の草稿なども展示されていた。美術館のリーフレットには、五浦美術館から日本美術院研究所跡(5分)、岡倉天心の墓(10分)、六角堂(1分)、五浦岬公園(10分)と片道合計、約30分の散策時間の目安が表示されていた。

約1時間の参観ののち、ツアーバスは地元の魚類専門店、松野屋に立ち寄った。お土産に地元の安い魚類を買い求める方もおられ、現地を午後4時10分に出発、北茨城ICから常磐自動車道を東京に向かい、守屋SAにて15分小休止ののち、東京駅・新丸ビル前に午後6時50分に帰着、解散した。

ご同行いただいた山口静一先生には、往路には日本フェノロサ学会機関誌に発表された清水恵美子著、『五浦の岡倉天心と日本美術院』に関わる先生ご自身の書評抜刷や『ジャポニズム研究』誌に発表された研究ノート『The Book of Teaのなかの誤記と誤植』を引用されながら天心のお話を伺い、帰路では横山大観が歌った日本美術院の校歌のCDが紹介され、岡倉天心の英文著作、『The Ideals of the East』(1902年ロンドンで刊行)、『The Book of Tea』(1906年ニューヨークで刊行)についてのお話も伺い、先生が入手されていた初版本も手に取り拝見し、ご紹介頂きました。

当日はお天気娘と自称される篠崎夫人のご参加があり、好天に恵まれました。翌日が雨天になったことから、尚更です。お世話いただいた山口先生、小泉先生、ご担当いただいた、幹事の三好様、篠崎様、酒井様に感謝を申し上げます。

追記：天心は26歳、明治22(1889)年東京美術学校を開校し、翌年校長に就任した。在職中には中国に美術調査で旅行していた。天心は日本美術の伝統を踏まえた日本画の創造を目指していたが、教育方針に反対するグループから私行を咎められて校長を解任され、明治31(1898)年、35歳で職を辞する破目にあつた。そこで天心を慕っていた教授たちが集団で美術学校を辞める騒ぎとなり、同年、東京谷中に天心主宰の日本美術院を創設し、美術の研究、制作、展覧会開催、機関誌の発行などを進めることになった。

明治34(1901)年、天心は38歳、インドに渡り、翌年まで佛蹟を巡り、且つ『東洋の理想』(前述)を執筆し、翌年ロンドンで刊行された。天心は明治36(1903)年、茨城県五浦に自らの土地と家屋を購入、明治38(1905)年、五浦に別荘を新築し、六角堂も建てた。

明治39(1906)年、広い敷地の中に日本美術院第一部(絵画)を移転させ、横山大観、下村観山、菱田春草、木村武山、4人の画家が家族と共に移住し、一堂に会して制作に励んだ模様が記録されている。当時の新聞では「美術院の都落ち」と揶揄されたようであるが、実際は明治40(1907)年開催予定の文部省美術展覧会(文展)を目途に美術家たちを指導し制作に専念させる積極的な意義をもっていた。この意図はみごとに成功し、日本美術史に残る名作を生むことになった。彼らは五浦で苦しい生活を共にしたと言われてきたが、現在残されている資料によれば、前金を受け取って絵を制作していたので、結構、恵まれた生活をしたと推察できるとのお話しであった。

明治23(1890)年に帰国していたウィリアム・S・ビゲロウに相談し、日本美術院を助ける必要もあり、明治37(1904)年、天心はボストン美術館の東洋美術コレクションの分類整理と目録作成を引き受けて渡米した。東洋文化を積極的に紹介しながら、日本・ボストン間を往復、明治43(1910)年、ボストン美術館の中国・日本美術部長に就任した。大正2(1913)年病を得て急遽帰国、同9月12日に療養中の新潟県赤倉で病没した。享年50歳。

現在の地所と建物は昭和17(1942)年、遺族(米山高麗子氏)から岡倉天心遺跡顕彰会に寄贈され、昭和30(1955)年茨城大学に移管されたものです。
(俣野 善彦記)

フェノロサ、ビゲロウ と三井寺法明院 正誤表

今回合本にあたり、気が付いた次の箇所の改定をいたしました。

① 氏名、地名、学校名についての表記の統一を図りました。

ウッツ博士	(通巻Ⅲ以降)	→	ウツズ博士
セイラム	(通巻3以降)	→	セーラム
ハーヴァード大学	(通巻3以降)	→	ハーバード大学
モビール	(通巻14以降)	→	モービル
アラン	(通巻14右段)	→	アレン

② 記載漏れ、誤記、その他につき、次の改定をいたしました。

櫻井敬徳(1834-1889)上第三回忌(通巻1左段)	→	櫻井敬徳(1834-1889) <u>大和</u> 上第三回忌
佛教法着 (通巻1左段)	→	佛教法義
『教畫(おしえぐさ)』 (通巻2)	→	『 <u>教草</u> (おしえぐさ)』
教授外山正一(とうやま まさかず)(通巻3)	→	教授外山正一(とやま まさかず)
明治6年ラトガース大学 (通巻3)	→	明治6年ラトガーズ大学
於法明院 E.R.Fellosa (通巻4右段)	→	法明院 <u>フェノロサ</u> 祭壇
「本地垂迹(ホンチ (通巻8左段)	→	「本地垂迹(ホンジ
ハウベンクキョウ (通巻9左段)	→	ハウベンクギョウ
ブラヴァツキ夫人 (通巻9右段)	→	ブラヴァツキ夫人
2500ドル (通巻12右段)	→	2600ドル
早川雪舟 (通巻18左段)	→	早川雪洲
井上哲次郎 (通巻18右段)	→	<u>金子堅太郎</u>
鐘は怯えだし (通巻21右段)	→	鐘は <u>震</u> えだし
アーキビショップ (通巻21右段)	→	アー <u>チ</u> ビショップ
1年後の昭和3年 (通巻25左段)	→	<u>2</u> 年後の昭和3年
大学の岸本 (通巻32左段)	→	大学の岸本 <u>研究室</u>
勳3等旭日章 (通巻31右段)	→	勳三等旭日章

③ 追記分は次の改定をいたしました。

略年表、1890年、明治23年
フェノロサ、37歳、契約満了で
文部省・宮内省を辞任、翌月家族・
ビゲロウと共に帰国(通巻34)。

略年表、1890年、明治23年、
フェノロサ、37歳、契約満了で
文部省(東京美術学校幹事)、宮内省
(帝国博物館理事)辞任、家族・ビゲロウと
帰国。

以上

後書： 補遺追加のこと

一昨年11月、日本ボストン会の創立20周年を記念して、会報に連載した山口静一会員に「フェノロサ：東西融合の思想」の題で発表をお願いした。昨年迄の上記連載分と併せ、その後の参考資料なども書き添えて合本改訂版を制作した。

フェノロサはハーバード大学修士課程修了後の25歳で日本に赴任(明治11年)、12年間に、東京大学で西洋の政治経済、哲学思想を教え、最後の4年間は、文部省・宮内省行政官として、日本美術の振興に大きな貢献を果たし、37才で帰国(明治23年)した。アメリカに在ってフェノロサが日本の文化・芸術を紹介し、日本理解のために尽力した功績は極めて大きいものがあった。

因みに、フェノロサの教え子であった岡倉天心は26歳でフェノロサの協力を得て、東京美術学校(東京藝術大学美術学部の前身)を開校(明治22年)し、翌年校長に就任した。天心は明治31年に辞職を余儀なくされた。この時、天心を慕っていた教授たちが集団で美術学校を辞める騒ぎとなり、同年、東京谷中に天心主宰の日本美術院が創設され、新しい日本美術の創出に関わる活動を開始した。これはかつてフェノロサが鑑画会を組織して目指した方向と同じ路線を行くものであった。

天心は明治34年に現在の北茨城市五浦に別荘を新築し、この地に日本美術院第一部(絵画)を移転、横山大観ほか3人の画家を家族と共に移住させて、絵画の制作に専念、明治40年の文部省美術展に出品させ評価される成果を上げた。天心はこの日本美術院の活動を助ける必要があり、ボストン美術館の理事であったピゲロウに相談し、明治37年に渡米、ボストン美術館東洋美術コレクションの分類整理と目録作成にあたり、明治43年には中国・日本美術部長に就任してボストンと東洋との文化的連携作りに尽力する。天心は大正2年に病気を得て急遽帰国し、同年9月に病没した。

天心が五浦の岸壁に建てた茶室六角堂はまさに東西文化融合の象徴だったが、平成23年3月の東日本大震災で流失した。管理者の茨城大学五浦美術文化研究所には、これを憂えた有志の募金が寄せられ、翌年早速再建できたことは、フェノロサや天心の理想が現代まで生き続けている証左である。

文化交流には、日本とニューイングランドの交流に見られるような、このように長い期間にわたる人と人のコミュニケーションが必要である。この合本がお役に立つことを願っている。

日本ボストン会 会長 長島雅則

平成26(2014)年8月15日

日本ボストン会会報掲載分「フェノロサ、ピゲロウと三井寺法明院」(合本改訂版)

会報発行連絡先： 日本ボストン会事務局



発行日： 平成25(2013)年11月15日

改訂版発行日： 平成26(2014)年8月15日